2015

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
3月号
No.621

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
2月号
No.620

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
1月号
No.619

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
6月号
No.624

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
5月号
No.623

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
4月号
No.622

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
9月号
No.627

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
8月号
No.626

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
7月号
No.625

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
12月号
No.630

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
11月号
No.629

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
10月号
No.628

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
1月号
No.619

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

謹賀新年

平成二十七年 元日

感受性

仙溪

いけばなと料理の共通点はいろいろあるが、自身の感受性を豊かにさせるという点も大きい。櫻子によれば、料理を続けていると、しだいに食材や調味料の特性がわかるようになり、それらを生かす工夫ができるようになってくるし、いけばなも一緒よ、とのこと。

なんでもそうだが、気持ちを込めて何度も何度も続けていると、はじめはできなかったこと、わからなかったことが、できるようになり、わかるようになってくる。自分という器が、だんだんと豊かになってゆく感覚といってもいい。

いけばなや料理は感受性を豊かにさせてくれる上に、まわりの人もしあわせにすることができる。美味しい料理や心のこもったいけばなは、「和み」を生んでくれる。

そんな花や料理がつくれるようになると、自然に「大切なものは何か」も見えてくるんじゃないかと思っている。季節のうつろいを肌で感じながら、ささやかでも、その時季の花や食材を味わうことがとても豊かなことなんだということもわかってくる。

ただお腹がふくれればいいとか、なんでもいいから生けておけというのではなくて、一手間を惜しまない暮らしを心がけたい。

鳳凰の舞い降りる木

仙溪

子供の頃は祖父母と住んでいたこともあり、正月には親戚が大勢やってきた。父や伯父たちは「おいちょかぶ」や「はなふだ」で遊んでいた記憶がある。花札の絵柄には季節の花や動物が描かれているが、その中の一つに「桐に鳳凰」というのがある。

鳳凰は中国に伝わる四つの霊獣（四霊）、すなわち麒麟、鳳凰、霊亀、応龍の一つで、平安のシンボルとされている。ちなみに麒麟は信義、霊亀は吉兆を予知し、応龍は変幻を表す。

平安を表す鳳凰は霊泉のみを呑み、竹の実のみを食べ、梧桐の木にしか留まらない。この梧桐はアオギリのことだが、古代の日本でいつしかキリに置きかえられたらしい。アオギリの花は白くて繊細、キリの花は紫色で力強く上に立つ。

作例で桐のつぼみにとり合わせた菊は、「シェイク」という名の新品種で、ドーナツのような不思議な形をしている。ピンクのピンポン菊とともに鳳凰を連想するに相応しい玄妙な美しさを感じていけてみた。伸びやかな葉の広がりを生かして、十分な奥行きをつくっていけている。皆さんの平安を祈って。

花材　桐（胡麻の葉草科）　菊三種（菊科）
花器　黒色釉水盤

冬の彩り

〈表紙の花〉　櫻子

葉牡丹は冬の花壇も彩るアブラナ科の植物でキャベツの仲間だ。ヨーロッパ原産の「ケールkale」と呼ばれる結球にならないキャベツが祖先である。中心の葉の色がピンク→白→グリーンと変化し、まるで薔薇の花のよう。春先には黄色の花が咲くのだが、葉だけで充分美しい。お正月は松や梅の足元に押し込められて窮屈そうに飾られている葉牡丹が気の毒だが、私はいつもスイトピーやチューリップと飾りたいと思う。今年は切れ葉で縮緬状の葉牡丹を多く見かけた。山羊型のトルコ水差しにもとてもよく似合う。

花材　葉牡丹（油菜科）
　　オンシジウム（蘭科）
　　スイートピー（豆科）
花器　山羊型陶水差し（トルコ製）

森の宝石

〈2頁の花〉　櫻子

バンダも、エピデンドラムも蘭の中ではとても好きで良くいけさせて頂いている。昨年秋の日本いけばな芸術展では根付きのバンダをコウモリ蘭に絡ませた。バンダという名前は「まとわりつく」という意味なので木や枯れた羊歯に絡みつくようにいけるのも違和感がなかった。根はとても空気を好む性質なので、霧を少し吹く程度で乾燥した会場でも元気で有り難かった。エピデンドラムはカトレアの近縁種でエピ（上）とデンドロン（樹木）で樹の上に着生するという意味になる。エピデンドラムもバンダも野生の姿を見た事はないが、名前から読み取れる雰囲気を大切にしている。

花材　エピデンドラム（蘭科）
　　バンダ（蘭科）
　　カーネーション（撫子科）
花器　洋陶器（ローゼンタール）

花の進歩

〈3頁の花〉　櫻子

紅葉のヒペリカムが珍しくてピンクカラー、赤薔薇と取り合わせた。昨年の11月下旬の花である。赤薔薇は一輪だけ。それで充分なくらい花も茎も葉もしっかりしていて、ヒペリカムの紅葉に負けていない。本数が少なくても花の向きを考えていけると良い。秋の日本いけばな芸術展でも横田慶重先生がいけられた花は、仏手柑に三本の赤薔薇と胡蝶蘭を取りあわせておられた。昔の赤薔薇なら10本はいけないと強さがなかったが、今の赤薔薇は強く丈夫で栽培技術の進歩に驚くばかりである。

花材　ヒペリカム（弟切草科）
　　カラー（里芋科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　陶コンポート（前田保則作）

立華時勢粧を読む　⑧

立花秘傳抄　四

（前号の続き）

立花細工の事

或人の云、立花は山木野草のおのづからなる景気を瓶にうつすを至極とす。然るに木をねぢ、草をためて立てる事いかがぞや。されば木をねぢ、草をたむるは、おのづからなるすがたをうつさんがため也。細工をしても細工と見えざるようにする時は、細工にあらず。

ゆがみたる見木を直になさんと思わば、内より鋸にて七分切り、三分残してくさびをかふ時は、曲がりたるものもすぐになり、すぐなる物も曲がるなり。木のおれやすき物は、火にあぶりてせんをかふべし。

心の除きわより込入りまでを、節もゆがみもなきように能くけづるべし。正心、副、請、流枝、控枝、同前に削りて、少しもすきまなきように立て合わせる時は、花きれいに出来、かこいも入れず、水ぎわもほそくなりて、下草自由につかわるる物なり。

松の葉はふのりを引き、わらにてまきて、葉をふせ遣うといえどさのみ好まず。

明日の花ならば、松、いぶき、黄楊、枇杷などは、葉も見木も一夜水につけて用いる時は葉色かわらず。

見木に枯れ枝、節など有るとも、あまりきれいにけづるべからず。出生の景気うするなり。

万の小枝は油火にてやき、ねぢためにして水へ入れて能くひやす。あたたまり有る時は、ためもどる也。

草のやわらかにほそきをたむるは、心をしづめ手の内にてたむる。心いそぐ時は、かならず折るなり。

晒木、常は瓦の屋根に置くべし。苔は板家の日影に置くべし。少しの間は紙にて巻き置くべし。晒木色のあしくなるは、あくを煎じて洗い、炎天にほすべし。

松のつぎめ見ゆる時は、松やにをもってつくろい、又蠟にてもつくろう。又松の葉あかくなさんと思わば、すおうをせんじて染めるといえど、さのみ好むべからず。

針金をやわらかになさんとおもわば火に入れてやくべし、それをまたかたくなさんと思わば小刀のむねにてしごくべし。

6

草木水あぐる事

蓮、こうほね、水あおいは茎を結び置いてその下より切るべし。

紫藤は夜半に切って水深くいけ置くべし。又藤は切るとそのまま遣うべき葉ばかりをのこし、残りはもぎていくるなり。又根をたたきひしぎて酒につくる。白藤は水あげやすし。花、物にさわれば色あしくなるなり。

竹ほそきは早く枯れる。三年四年竹をよしとす。又切って根をやくべし。又上の節をぬきて水を入れる。笹しおれたる時は酒を吹く。

竹草は夕に切ってよし。仙翁花、雁緋は日盛（ひざかり）に切ってよし。水をかくればかえってしおるる。一切の花、充分に開きたらば水をはなして箱に入れてよし。杜若、芍薬、菊など五里十里の遠方へ遣わすに、箱に入れてよし。水木、梅もどきは、切ってはやく葉をとらざれば実しおるるなり。室咲きの花のたぐいかならず水をかくべからず。

花瓶の事

瓶は仏在世に舎利仏、土器を二つ取り合わせ、諸花を生けたる故、瓶の字、瓦に併せると書くと云えり。

花瓶図を考えるに、唐に花瓶と名付くる物なし。今日本に用いる所、唐の酒器なり。古代は花形ちいさきゆえに、瓶もちいさく、近代は花おおきなれば瓶も又大きなり。込入りのふときを用ゆれば、水ぎわほそく指しよきなり。

古代より耳口、菱、角花瓶のあしらいとて、角又は耳の上へ下草を出しかくす事を嫌うなり。

草の心には花瓶ちいさく、木の心には大きなるを用うべし。

夏の花には瓶に水うつ事有り。但し地文あるにはうつべからず。

貴人より花瓶出さるる時、焼き物又はから物ならばふとき心、おもき晒木苔を用うべからず。花もかろく立てる。是を花瓶あしらいと云う。

耳のなき角花瓶ならば、角を前へ取るべし。

床に花台をなおさば、前後は畳の目をかぞえ、横はたたみの筋を見合う。真中は懸物の折釘を、定法にして花台をなおし、さて花瓶をおくべし。

近代は花瓶風流をつくす。古代は瓶に景多き時は、花に心うすしとて地紋あるだに是を嫌う。誠に花に大切なる心、さもあるべき事なり。

石化柳　薔薇

仙溪

花形　草型　副流し　二種挿し

花器　陶コンポート（柳原睦夫）

陶芸作家、柳原睦夫さんの作る器はとてもモダンで、そのため普段はいける機会を失しているが、ここぞという時のためにとってある。石化柳に菊や椿の根締めなら自然調の器を選ぶが、深紅の薔薇を選んだので、この器にした。

石化柳に赤薔薇はよく映る。帯化した力強い造形美がモダンに見える。上質の薔薇は撓めても長くもってくれた。

レモンちゃんを手なずける副家元と、レモン師匠の○○の家元。

水仙一色

仙溪

花形　立花　真の花形
花器　陶花器

立花研修会で立てた直真の水仙一色立花。九つの役枝だけで、やや小振りに立てた。受筒は著莪の葉で隠している。

あしらいの葉を加えて、もっと厚みのある花形にするなら青銅の立花瓶を選ぶところだが、素朴で身近な立花なので、オランダの陶芸家からいただいた焼き物の器を選んだ。

ザールバーグさんとは一九八八年にドイツでお会いして以来のおつきあい。ジョージ・デビッドソンさんのキクスクールいけばな合宿特別講師として家族みんなで行ったときに、生徒さんのいける器のほとんどは彼がつくったものだった。

父の立花が好きだったデビッドソンさん。彼女のいけばなを支えたザールバーグさんも古典花に関心が強く、その水際の美しさもよく理解されている。数年前に奥様と日本に来られた時に、この器をいただいた。毎月テキストを贈呈しているので、喜んでいただけると思う。

赤芽柳　椿

仙溪

花形　行型　二種挿し
花器　銅器

右ページの立花の器とは対照的な胴製の器。十三世の「専溪生花百事」の中では、金茶の二輪菊を草型留流しにいけておられる。中国古代の祭器に見られるような装飾が施されていて環の耳がついている。テキストでもめったに使ったことのない器だが、力強い赤芽柳を受け止めてくれる器を考えたときに、ふとこの器を思い出した。

今号の「立華時勢粧」解説で、「花瓶の事」の中に「貴人より花瓶出さるる時、焼き物又はから物ならばふとき心、おもき晒木苔を用うべからず。花もかろく立てる。是を花瓶あしらいと云う」とある。貴人の器は大切に扱うべしという戒めと、器と花材の調和（軽重、品格などをそろえる）に配慮せよとの教えである。他にも興味深いことが書かれている。

根締めに選んだ椿の色が気に入っている。薮椿ほど濃くはなく、西王母ほど薄くない、ちょうど頃合いの色が、赤芽柳の赤色と黒々とした銅器の色のつなぎ役にぴったりだ。

器と花材の選択はとても奥が深い。いろいろと試してみながら、お気に入りの組みあわせを、自分の引き出しにしまってゆけばいい。

桑原専慶流いけばなテキスト619号　2015年1月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出合い花（16）

仙溪

千両
シクラメン

いけばなの素晴らしいところの一つは、季節の輝きを身近に楽しめることだ。出合い花をいけるようになって、あらためて小さな花の輝きに気付くことが多くなった。

写真のシクラメンには「シューティング・スター」という名前がつけられている。珍しい品種なので値段もそれなりのものだったが、鉢は陶器の深鉢に入れてダイニングに飾って楽しみ、時々花と葉を切っていけて二重に楽しんでいる。

大輪で花茎も長いので、小さな器ならそのままいけることができるけれど、新春の出合い花でもあるので、竹ひごと小枝を使って、器から立ち上がるようにしてみた。どのようにしてあるかはご想像ください。

シクラメンは桜草科・シクラメン属の多年草で、花期は秋から春。地中海沿岸の涼しい雨期に咲く花だ。名前は「螺旋」に由来するが、これは受粉後の花茎がぜんまいのようにくるくると丸くなるところから。花弁は蝶が舞っているようにも見える。

千両は庭から小枝を一枝切っていけた。千両科・千両属の常緑小低木で東アジアからインドに分布する。赤い実が喜ばれ、また縁起がいい名前なので正月の大切な花材になっている。

日本の冬を彩る和洋の組みあわせ。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
2月号
No.620

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

蘊奥とは

仙溪

「蘊蓄を傾ける」という言い方がある。持っている知識や技能を精一杯発揮するという意味だが、「蘊」には、積む・蓄えるという意味がある。この蘊に奥をつけた「蘊奥」という言葉はご存知だろうか。「学問、技芸などの最も奥深いところ」を表す熟語だ。芸の蘊奥を極める、などというように使われる。「うんおう」又は「うんのう」と読む。

先月のテキストに、何でも長く続けると、見えなかったものが見えるようになる、というようなことを書いたが、花の奥義を極め、多くのお弟子さん達に慕われるようになられた大師範の先生方は、まさに様々なことを体得され、その一つ一つがご自身の内に積み重なって、素晴らしい知識や技能の蓄えをお持ちだ。

そんな大師範には、しかるべき役職にお就き頂いて、私が道に迷った時に教えを請いたいとの思いで、この度、家元になってはじめて、数名の先生方に「華老」位に就いていただくことにした。そしてその委嘱状に、「蘊奥」の発揮を願う一文がある。技術や知識はもちろんのこと、豊かなお人柄も見習わせていただきたい。

先日は岡山での総会・新年会で華老の授与式をさせていただいたが、それぞれの先生のお人柄を感じる、素敵なご挨拶をしていただき、胸が熱くなった。

華老の先生方（敬称略）

上野　淳泉（岡山）
竹中　慶敏（京都）
小野　静泉（岡山）
武田　慶園（徳島）
長谷川慶賀（大阪）

この度、次の先生方に、華老にご就任いただきました。

山本　竹泉（岡山）
竹内　慶陶（京都）
岩沢　雅芳（岡山）
横田　慶重（京都）
鈴木　秀映（岡山）
和田　慶千（大阪）
室山　粋声（岡山）
尾﨑　慶和（徳島）

今月号で紹介した「立華時勢粧」の中には、いけばなを習う心得について「事と理」があると書かれている。辞書を見ると「事」はものごとの事物・事象のこと、「理」はその背後にある真理と説明されている。まず、いけ方を身につけることに専念し、上手になったら「どんな花をいけるか」を考えよ、ということなのだと思う。

華老の先生方の花はいけ方はもちろん上手いうえに、皆さん独特の雰囲気がにじみ出ている。「事理不二の境に至りて花に自由を得べし」なのだ。父もまさに自由を得た花をいけていた。私もそこを目指したい。

牡丹と雪柳　　仙溪

「この深い紺色の器には、薄紅色が鮮やかな、この牡丹がいいと思うの。雪柳と二種でどうかな」と、副家元が花屋でそこまで決めてくれていた。今回は花器ありきで、合う花を考えるという決め方。私がいけることになった。

いけながらとても自然な組みあわせだと思った。雪柳を一方に集めて、牡丹をそっと挿しただけだが、静と動、軽重の対比を楽しみながらいけた。

花材　牡丹（牡丹科）
　　雪柳（薔薇科）
花器　線刻陶花瓶（竹内真三郎作）

水仙一色立花　　仙溪

先月のテキストに掲載した水仙一色立花は、直真立てと云って真が直立している。もし真が左に除くと除真立てとなるが、その場合の真の水仙は右の葉が左の葉よりも高くなる。よって直真立ての真の水仙も右を高くすべきなのに、逆に左を高くしてしまっていた。今後、皆さんが混乱しないように、絵に描いて訂正します。

水仙一色立花

直真立　真の花形
真、副、請、見越、正真、控枝、流枝、胴・・・水仙
前置・・・小菊

臘梅（ろうばい）の立花

〈表紙の花〉　挿花　中道慶清

「冨春軒初春の会」で、もてなしの花として立てた三つの立花を解説する。

この真、請、見越の臘梅は一本の幹から出た分かれ枝をそのまま花形に取り込んである。立派な臘梅で、撓めると折れてしまう。本来の見越は請側の後ろに出るのだが、真側の後ろに出ていた枝を生かして残し、本来の見越の出口に松を覗かせている。臘梅が際立つように、他の役枝は軽くつくられている。

花材　臘梅（臘梅科）
　　松（松科）
　　水仙（彼岸花科）
　　椿（椿科）
　　枇杷（びわ）（薔薇科）
花器　天女模様銅花瓶

老松の立花

〈2頁の花〉　仙溪

真と請の老松のバランスが見所。真の松は直真のように直立し、上の方で右に除いてから大きく左へ出た枝だったのをそのまま使った。自分としては直真として立てている。松の緑と木瓜（ぼけ）の朱色は相性がいい。金明竹（きんめいちく）を見越の下にあしらうことで、新年を言祝（ことほ）ぐ気持を添えた。

花材　老松（松科）
　　木瓜（薔薇科）
　　枝垂柳（柳科）
　　金明竹（稲科）
　　菊（菊科）
　　椿（椿科）
　　銀芽柳（柳科）
　　枇杷（薔薇科）
花器　銅花瓶

雲龍梅（うんりゅうばい）の立花

〈3頁の花〉　挿花　阪本慶純

雲竜梅はとても香りがいい。玄関の間に松の立花、その右の間の床に臘梅、左の間の床に雲竜梅を飾ったが、それぞれに初春の香りを楽しんで頂けたと思う。床の大きさにあわせて、雲竜梅の立花は小さめに立ててある。「萬歳寿而康（ばんさいじゅにしてこう）」の書の軸を掛けてその前に飾ったが、字を隠さず、よく調和していた。松の立花は金屏風の前、臘梅の立花は金地に波模様の舞扇の軸の横に飾った。

真が右に張っているので、流枝でバランスをとっている

花材　雲竜梅（薔薇科）
　　寿松（ことぶきまつ）（松科）
　　椿（椿科）
　　アイリス（菖蒲（あやめ）科）
　　小菊（菊科）
花器　銅立花瓶

立華時勢粧を読む　⑨

立花秘傳抄　四

（前号の続き）

込の事

込の高さ、冬は瓶の口より二分ひくく切るべし。夏は三分、草花に水をよくあげんがためなり。

ふとき物さす時は、少しやわらかにしめ、ほそき物にはかたく結うべし。緩急の境、よくわきまうべし。

わらのはかまをとり、真中より二つに切り、切り口を上になし、結い目の上を、つよく打って、つよくしむべし。

床前の事

立花、初めての方へ立てに行く時は、床見申度よし、兼ねていいつかわし、方丈書院、仏前、床の高さ広さ、奥行き左明かり、右あかりを、よく見立て、懸けものかけさせ、いかなる祝儀、又は客の名字をも尋ねて、万指し合いなき様に指すべきなり。

床ぶち高くは、花台ひくく。おとしかけより、心はひくく。前置、流枝、床ぶちより、前へ出すべからず。後ろへ枝葉さわらず。横は張付へかまわず。床ふかくは、花形まろく、床浅くは、花形ひらめに指すべきなり。

掛字、懸絵、よく見ゆる様に、花形取り組むべし。名印の所かくす事大きに嫌う。又懸物あしらいがたき時は、砂の物を用うべし。

床の張付、人形生類のたぐいならば、同心得有るべし。

掛絵、草木にて風をもちたる気色あらば、立花にも、その風を請けてもたすべしと云えり。

いまだ懸物見ざる方へ行くならば、心を二本こしらえて行くべし。又柳梅もどきなどの、葉のなき物を用意すべし。

大床に、三瓶立てる時は、中は当季の花を、心に用うべし。

掛物、三幅対、四幅対の時、二瓶又三瓶のおきよう有り。

絵を請けて指す花、天神に梅、観音に柳、達磨に芦、龍に松、虎に竹、獅子に牡丹、ほかこれになぞらえて、作意有るべし。

上座の方へ、流枝を出し、請に珍花を指す。古来の法なり。然れども上は心より、下は水ぎわに至るまで、客賞翫と、意得て指す時は、花形風流に、作意多く、あらたなるを、珍花というべし。

下指の事

客花ならば、下指よくいたすべし。昼の客ならば、朝に行き、朝の客ならば、夕より指すべし。花おそく、客来るを待つ時節には、亭主気遣うものなり。

下指は、十の内七八分ほどして、根じめあしらいなんどを、残すべし。亭主方、見物ある時、あまり無造作なるも興なきものなり。

客花には、草花に限らず、充分に盛りなるを用いるべからず。前かたより、中びらきを立て置き、客来の時分、よくひらくように心得べし。

立花見様の事

花を見るに、礼儀を以てし、さて床前五尺ばかりに寄せ居て、先ず心、正心、副、請、見越、流枝等の、大枝の取り組みを、能く見て、又左右へ礼儀をのべ、その後床前へ近くより、胴、前置、水ぎわの、こまやかなる所を見るべし、かならず、水ぎわ、又はうしろをのぞき見るべからず。

初心の花なりとも、かるがるしく見て立つべからず。指し合い法度有るとも、不審打つべからず。亭主所望するとも、率爾に、直すべからず。上手の花なりといえど、悪しき所なきにあらず。初心の花なれども、又よき所あらずという事なし。そのよき所を見覚え、悪しき所を見過ごすべし。世人花を見て、あしき所をかたれども、よき所を語らず。その心花にあらざるがゆえなり。

立花習いようの事

花を習うに、先ず直心立をよく指し覚え、又除心、行草九品の花形、次第に修練すべし。凡そ事理の二つ有り。初学の時は、事を先にして理を後にすべし、瓶数重ねれば、おのずから、指し合い法度を除くべし。中此に至りては、事理両輪のごとくすべし。上手になりては、事を捨て、理を工夫すべし。然る時は、事理不二の境に至りて、花に自由を得べし。

師に花の直しを請ける時は、瓶の水七八分に入れ置き、下草を用意して相待つ時、師来たりて、褒美する事有れども直しを乞うべし。一手なおる時、今一手としいて乞うべし。師の法にて、二手よりはなおさず。尋ねる事あらば、人なき所にて問うべし。又は師家にあゆみをはこびて、その執心をあらわさざれば、師おしえざる物なり。

伝授と云うは、道の尊敬、芸の奥義なり。かるがるしく、人に語る事をなさず。金も用いざれば、瓦石に同じ。たとえば伝授したりとも、修行未熟ならば、何の益かあらん。師印可すというは、事理相応の時節を待って、これをゆるす。

初学の時は、下草多く、花形あつく、出物ゆるやかに指すべし。巧者になるほど、花きれいに、小体になるものなり。世人ここに止まりて、よしとおもう。これいまだ上手の位にあらず。必ずきれいになづむべからず。

一瓶の床花は、花形やさしく、手つま細やかに、見所おおきをよしとす。会の花は、花形風流に、目に立つように指すべきなり。上手の花は、下草多からずして景多し。これを薄うて厚しという。下手の花は、下草多く見所なきを、あつうてうすしと名づく。

立花秘傳抄の四　終

7

春の声

＜9頁の花＞　仙溪

枯葉の間から春の花たちが顔を出しはじめる。頭上の木々に葉が茂るまでに、葉を伸ばし花を咲かせる。温もりはそこまで来ている。春の声に耳を澄ませよう。

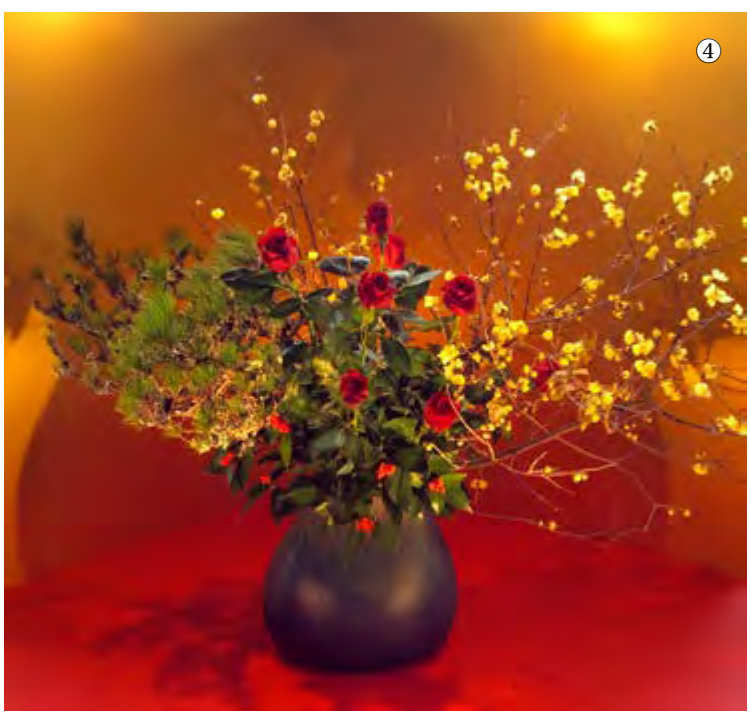
花材　鶯神楽（忍冬科）
　　喇叭水仙（彼岸花科）
　　スイートピー（豆科）
花器　金彩舟形陶花器

京都駅新春のいけばな

写真④　仙溪

駅前広場に年末から7日間飾ったいけばな。赤い薔薇はサムライという品種の特級品で、和歌山の生産者のもの。作り手の愛がつまっている。

花材　臘梅（臘梅科）
　　老松（松科）
　　薔薇（薔薇科）
　　千両（千両科）
花器　彩泥陶花器（宮下善爾作）



花の見方

仙溪

「立華時勢粧」には「立花見様の事」として、人が立てた立花を拝見するときの心得について書かれている。

例えば招かれた家の床の間に立花が立てられてあるとして、どのように拝見すればよいかが詳しく書かれている。現代ではそのような機会は希になったが、心得として覚えておこう。立花は手間をかけて立てるのだから、拝見にも礼儀をつくしたい。

また「世人花を見て、あしき所を語れども、よき所を語らず。その心花にあらざるがゆえなり」とも書かれている。初心者の花でも何かいい所を探すようにしなさい、見つけたいい所を覚えておきなさいと教えている。

花の道を極め、花から何かを得ようとするならば、他人の花の批判ばかりしているようではだめですよ、ということだ。たとえお弟子さんがいけた花であっても、そこに新たな発見ができるような、大きな器を持ちましょう。

黄色に紫をそえる

＜10頁の花＞　櫻子

黄色と紫色は反対色で、黄色は若々しい明るさ、紫色は大人びた高貴なイメージがある。作例では緑色と黄色の構成に、鮮やかな紫色をポイントで加えて色彩をひきしめてい

る。

リューココリネ（レウココリネ）は南米チリのアンデス地方に分布する百合科・リューココリネ属の多年草。切り花でもいくつかの花色があるが、紫の花色が多い。ほのかに良い香りがある。

花材　ミモザ（豆科）
　　チューリップ（百合科）
　　リューココリネ（百合科）
花器　結晶釉水盤（前田保則作）

器から花を選ぶ

＜11頁の花＞　仙溪

この花も、4ページの花も、自宅での新年会で部屋の設えとしていけた花で、どちらもはじめに花器が決まっていて、花器に合う花を考えていけている。いつも「テキスト」の花は、花をはじめに選んでから花器を考えることが多いのだが、花器が決まっているというのも花選びの勉強になると思う。

緑として使ったブプレウルムは、和名をツキヌキサイコ（突抜紫胡）という。芹科・三島紫胡（みしまさいこ）属（ブプレウルム属）の一年草で、ヨーロッパ原産。優しい緑色と、ユニークな姿が初春の清々しさを感じさせてくれた。

花材　カトレア（蘭科）
　　シンピジウム（蘭科）
　　ブプレウルム（芹科）
花器　耳付陶花瓶（竹内真三郎作）

桑原専慶流いけばなテキスト620号　2015年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

楽しくなる器

櫻子

器を買いに街に出ましょう。

私が器を探すとき、何のために花をいけるかによって、見方を変えている。花展用なのか、テキスト撮りのためか、料理教室のテーブル飾りか。飾る場所をイメージして、その場の雰囲気に似合う器を探す。

春らしいラナンキュラスと菜の花をいけた器は、私のイタリアン・レッドのキッチンでよく使っている。どんな色の花でもモダンに飾ることができるのと、摩天楼のような形が楽しい。

花材　ラナンキュラス（金鳳花科）
　　菜の花（油菜科）
花器　陶花瓶（伯耆葉子作）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
3月号
No.621

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

金魚草の秘密

＜表紙の花＞　櫻子

今年も寒い頃から立派な金魚草が売られていた。小、中くらいの丈の花は花壇に植えられているが、大きいものは切り花に向いているらしく色も多彩になってきた。地中海沿岸（南欧～北アフリカ）の園芸種の花で本来は5月頃が咲く季節だと思う。

日本や中国では金魚草だが、アメリカでは噛みつく龍、ギリシアでは鼻のような、フランスでは狼の口という名前で呼ばれる。古代の文明では霊的な力があるとされた。庭に植えると災いから守られ、食べると若さと美しさを取り戻すとか！。エディブルフラワーとして良く料理に添えられている金魚草だが、そうと知ってはいても食べようとは思わない。

花材　金魚草（胡麻の葉草科）
　　小手毬（薔薇科）
　　ドラセナ（竜舌蘭科）
花器　ペルシャ花瓶

生花二作

仙溪

＜2頁の花＞

木瓜　椿

花型　草型　副流し　二種挿し
花器　紫紅彩花瓶　幾左田昌宏

＜3頁の花＞

啓翁桜

花型　草型　副流し
花器　天女模様赤胴花瓶

この二作の生花の花器は、どちらも十三世家元ゆかりのものだ。

昨年の春に京都青窯会の皆さんと一緒にイベントをさせていただいた時、その懇親の場に幾左田昌宏さんも来ておられた。京都陶雅会の西岡隆一さんと共に家元宅に来られたことを、つい昨日のことのようにお話くださった。

「こんな形のでけへんか」と、十三世がアドバイスをして、同じ形をいくつか作られたそうだ。下蕪のかたち、繊細な口のつくりに、作り手の高い技量と品格を感じる。「あの頃とにかくどんな形のをつくったらええんかわからんから」と云っておられたが、「ええもん作りたい、面白いもん作りたい」という気持が人を出会わせるのだなと思う。どんな世界でも、この気持がないといいものは生まれないのだ。

そしてこの銅器も十三世がデザインした一点物。口の広がりが、立花や生花の水際を美しく見せてくれる。片側で天女が笛を吹き、反対側では舞い踊る。表面は部分的に赤みがかっているが、これは赤い漆を焼き付けてあるのだ。

これらの器に花をいけさせてもらえることに、感謝している。

啓翁桜一色の立花

仙溪

花型　除真立花　行の花形
「請上り立」
花材　啓翁桜（真　副　見越
　　請　流枝　控枝）
　　アイリス（正真）
　　松（胴）椿（前置）
花器　陶花瓶

昨年3月の立花研修会で立てた立花。「行の花型、請上り立（うけあがたて）」という花形で、請の出口を基本よりも高くしている。竹などの下へなびくような枝を請にするための花形で、桜の枝が川面に枝を伸ばす光景を思い描いて、請の枝先を下へさげている。

写真で見ると、もう少し請の出口に近いところで撓めて、ビュンと下へさげてもよかった。それと流枝の出口が高すぎた。太い幹を加えればよかった、などと反省点があれこれ見えてくる。

本来、桜一色の立花には他の花を混ぜないことと書かれているが、啓翁桜のように華奢な枝の場合は花を添えてもいいだろう。

立華時勢粧を読む　⑩

立花秘傳抄　五

九品の花形立様の事

極真立

極真の立花は、祝言第一にして、心若松のすぐなるに、枝三段五段を用ゆ。心の高さ瓶に二長半。又は一長半。古来の説同じからず。近代は三具足、さまざまに替わり、定法なきに似たり。然れども蝋燭立ての高さに隨いて、立様口伝あり。大かた仏前の様子、三具足の大小にしたがいて、時によろしく立つべきなり。

心かくしは、禿松、芍薬、菊などの、かたち丸き物。心に取りあいて、副を付くるに、たよりあり。ほそき物は、心のみきほそきゆへ、取り合いあしきなり。草木にかぎらず、出生直なる物、皆心かくしに用ゆ。一の枝と、心かくしとの間、一寸二寸、花形の大小によりてあくるなり。心かくしは心の前を守りて、心に勢いをあらする役の物なり。

副は心かくしの本より、物にたよらせて、しだれたるもの。又はやわらかなる物を用うべし。心の松のこわごわしきに、取り合いよろしきがためなり。これ花形の右の方を守りて、心をそだてたる物なり。右へ出る物、副より長きはあるべからず。

第四図
立花　松直真
直心立の内真の花形　桑原正栄
松　蔓梅擬　菊　檜　柘植　杜若
檜扇　樫木　小菊　夏はぜ　柏

請は神前にては、影向の枝といい、仏前にては手向という。かならず時の珍花を用い、出生上へきおいたる物を用ゆ。副のしだれたる物との取り合いなり。出し所は、副と流枝とを見合い、その真中ほどより出すなり。左へ出る物、請より長く出る物なし。これ花形の左の上を、よくまもる道具なり。

見越は、心かくしの後ろより、木高く立ちのぼせて、請の方へなびかす。見越は心の後ろを守って、心の勢をつよくなす物なり。後ろへ出る物、これより長きはあるべからず。

流枝は松にかぎりたる物なり。煙がへしとも、香炉のぞきとも名づく。瓶の口二寸ほど上、後ろ角より一文字に出して、葉先を香炉の真中にてとむるなり。心すぐに、副なびき、請、きほいたるにより、流枝を一文字に指す。これ上の枝の取り合いよろしきがためなり。一瓶の内流枝よりひくく出す物なく、又水ぎわにてこれより長き物あるべからず。

前置の出口、流枝と同前。胴よりのうつりを請けて、左右へかたよらず、真向（まむき）にたて、瓶の口をかくさず、前へ出る物、これより長きは有るべからず。ただし見越と、前置とは、前後の釣り合いなり。

胴作りとは、心かくしの下より、前置の上までを云う。これ七つの道具の外にして、花形の中央を守り、七つの枝を、よく養いそだつる物なり。

第五図
立花　松直真
直心立の内行の花形　桑原正栄
松　薄　躑躅　杜若　柘植　要　小菊
枇杷

控枝は、七つの枝の外なり。出し所は、請と流枝との真中より出す。請の方おもき時は、おもきものを用い、かるき時は、かるきを用ゆ。これ左右の軽重をはかる物なり。

直心立は、祝言第一の花なる故、仏前に立てるといえど、六花六葉、四花四葉、四草四木、雑木雑草、その外祝言にあらざる法度を守り、花形の格式すこしも背かず、草木きれいにすなおなるを用い、長高く、幽玄に指すを本意とするなり。古人曰く、真の花形と云うは、たとえば人の面のごとし。目の有る所に目有り、鼻有る所にはなのつきたるように、いつもかわらぬ様にさすべしといえり。

直心立の花には、後ろに草を遣わず。草どめを流枝控枝の後ろにてとむることなし。これを山後に野を見るとて、嫌うなり。

直心立、行の花形と云うは、心は笠松なり。流枝は松を用ゆ。七つの枝の出所、前に同じ。胴前置は、すこしくるわせてもくるしからず。

同草の花形というは、心に梅、海棠、梅もどき、水木、檜、鶏頭などの直なるを用ゆ。七つの枝、出し所前に同じ。草の心の時は、見越、流枝、前置草にても苦しからず。惣(すべ)て心松ならざるを、草の花形と名付く。

【注記】

極真立とは直真立のうち真の花形のこと。ここでの七つ道具の解説は、極真立に限っての約束事が含まれている点に注意。

第六図
立花　鶏頭直真
直心立の内草の花形　冨春軒仙溪
鶏頭　柳　梅擬　菊　夏はぜ　擬宝珠
樫木　檜扇　伊吹

ポピー

櫻子

今年は立春を過ぎても寒い日が多く、花屋さんに並ぶ春の花達も咲くまではしばらく時間がかかったよう。固いつぼみのポピーは最初は下向きで頼りなさげ。水切りして暖かい部屋に置いておくと、くっと顔を上げて蕾が二つに割れ、あっという間に大きな花が咲いてきた。

この瞬間が楽しくて春は必ずポピーをいけている。少し細かったので、連翹と取り合わせた。枝ものと合わせる事は珍しいが、連翹の優しい線がポピーの動きを助けてくれる。

スイスの公園で澄みきった青空の下、光を集めたように咲く連翹と初夏の小麦畑でしっかりと力強く咲くヒナゲシの花は、今でもはっきりと目に浮かぶ。

花材　ポピー（罌粟科）
　　連翹（木犀科）
　　スイートピー（豆科）

花器　白磁花瓶

山茱萸（さんしゅゆ）の投入

＜10頁の花＞　仙溪

枝を二種に花一種のとり合わせ。

春の花木は葉がないので、椿を添えて水際に繁みをつくることがある。添える花は菊、アイリス、透し百合、鉄砲百合など、和の雰囲気に合うものがいい。

花材　山茱萸（水木科）
　　椿（椿科）
　　菊（菊科）
花器　赤茶釉陶花瓶

波紋の器

＜11頁の花＞　仙溪

広々とした麦畑。春の風で穂が波打つ。この器の表面の模様も、目には見えない風を、目に見える形にしたかのような流れだ。

宮永東山氏の器は、幾何学的な面と面が組み合わさってできている。その面の表にもまた幾何学模様の連続がぐるりと一周する。硬い質感と柔らかなフォルム。不思議な器だ。

まだ冷たさを含んだ春一番の風に目を覚ました花たち。そんなテーマでいけてみた。アルストロメリアを低くいけて、野の花のように見せている。

花材　青麦（稲科）
　　矢車菊（菊科）
　　アルストロメリア（彼岸花科）
花器　五面青白磁壺　宮永東山作

被曝対策

仙溪

2月24日、東京電力の発表によると、福島第一原発から高濃度の放射性物質を含む水が海に漏れ続けていることが明らかになった。それも昨年4月に把握しながら公表せず、対策もしていない。流れ出続けているものには、体内に取り込むことで体を蝕む大変危険な核種が含まれている。

そろそろ私達は本来知らされるべき危険について、隠されているのではと疑ってかかったほうがいいようだ。自分達の身は自分達で守る、そのために情報交換が大切になってくる。

心配しすぎてもいけないのだが、命あっての物種である。放射能の(正しい)知識を身につけて、その対策を講じつつ、元気はつらつで！

桑原専慶流いけばなテキスト621号　2015年3月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出合い花（17）

仙溪

チューリップ
ガーベラ

朝は私がコーヒーをいれる。愛用のマグカップは、仙齋&素子からのプレゼントで、櫻子は赤色、私は青色だ。かれこれ20年間お世話になっている。

シルクハットの男性が三日月に腰掛けて、赤いハートを持つ絵は、いかにも父が好みそうだ。書斎にいても、この絵のように心は自由に飛び回っていたのだと思う。

出合い花で一度いけてみたかったのが、チューリップとガーベラだ。どちらも種類が豊富なので、いろんな組みあわせが楽しめる。いける器は、お気に入りのマグカップにどうぞ。

花材　チューリップ（百合科）
　　ガーベラ（菊科）
花器　マグカップ&プレート

レモンだより

干支（えと）にちなんで。メ～エ。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
4月号
No.622

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

貝母（ばいも）　＜表紙の花＞　櫻子

貝母は漢名で、中国原産の多年草。球根が漢方薬にされる。和名ではアミガサユリとも呼ばれ、花の内側に網状の模様がある。球根は二枚貝のような形をしている。

父の文章といけばなを纏（まと）めた「仙齋彩歳」には初夏にいけられた貝母の実と仙翁（せんのう）、鳴子百合（野生種）の投入がおさまっている（71頁）。6枚のプロペラのような実の面白さと、繊細な葉の枯れ色は、いかにも父好みの不思議な美しさがある。

仙翁は撫子（なでしこ）科に属している。記憶の中から父の花が作用したのか分からないが、春の貝母には撫子と鳴子百合を選んでいた。父は白黒の陶花瓶にいけていたが、私は軽やかな漆器にいけて剣山を苔で隠してみた。漆器に花をいけると、特別な感じがする。上品な金彩の花模様、底面の朱色が優しさを添えてくれる。

花材　貝母（百合科）
　　撫子（撫子科）
　　鳴子百合（百合科）
花器　金彩高台漆器

ウロコ文様の花瓶

＜2頁の花＞　仙溪

使いにくい花器というのがある。でもとり合わせによっては独特の雰囲気を出してくれる花器。この鱗文様の花瓶もその一つで、高さが44チセン

もある。

家に飾っていたシンピジウムの鉢植。長く伸びた葉は光沢があり魅力的だ。思い切って花3本と葉10枚を切りとり、グロリオサを合わせて鱗文様の花瓶にいけてみた。

花器の派手さに対して、花の強さとシンピジウムの葉の広がりが、ほどよくバランスをとってくれた。

花材　シンピジウム（蘭科）
　　グロリオサ（百合科）
花器　鱗文様陶花瓶

ガイラルディア

＜3頁の花＞　櫻子

花屋で「これはルドベキア？」と聞くと「それはガイラルディアです」と教えてくれた。どちらも北アメリカ原産の初夏から秋まで咲き続ける多年草。ルドベキアはスウェーデン人の、ガイラルディアはフランス人の名前に由来する。明治時代に渡来している。

品種により天人菊（てんにんぎく）、大天人菊（おおてんにんぎく）という和名がつけられている。花弁の色が先端で切り替わる不思議な花だ。

はじめていける花なので、相手の選択に迷ったけれど、同じ色が虹のように入るアイリスを選んで、白黒の器にいけると、優しい暖かみを感じさせてくれる花になった。

花材　アイリス（菖蒲（あやめ）科）
　　ガイラルディア（菊科）
花器　印花文陶花器（近藤豊作）

檀香梅（だんこうばい）

仙溪

春の花木の中で、枝を切った時に仄（ほの）かに良い香りがするものがある。辛夷（こぶし）などの木蓮（もくれん）科の仲間と、青文字などの楠（くすのき）科の仲間がそうだ。楠科の黒文字（クロモジ）を削って、和菓子を食べるときの楊枝（ようじ）に使われるのも、材に香りがあるためだ。

檀香梅も楠科・黒文字属の小高木で、木に香りがることから、ビャクダンの漢名である檀香の字があてられている。

関東以西の暖地の山地に分布し、3月下旬から4月に葉の出る前に開花するので、山の中でよく目立つ。

飴色の花器に檀香梅をいけ、鮮やかな赤椿で水際をひきしめ、さて花を何にしようか。

早春の和の草花は、落ち葉の間から顔を出す小さな花がほとんどで、背の高い草花は限られている。貝母や黒百合は、芍薬などが出るまでの間の貴重な和花だ。

そんな思いを察してか、近年、黒百合の切り花が出回るようになってきた。おそらく京都だからということもあるかもしれないが、有難いことと感謝している。

花材　檀香梅（楠科）
　　椿（椿科）
　　黒百合（百合科）
花器　陶扁壺（林平八郎作）

立華時勢粧（りつかいまようすがた）を読む　⑪

立花秘傳抄　五　（つづき）

除心真の花形立ようの事

除真の真の花形と云うは、心のゆがみたる計りにて、大枝の出し所、さのみ直心立と替わる事なし。図にしるしてここに略す。先ず心を立て、その次に正心を立て、副を付け、見越、請、流枝、胴、前置、控枝と、次第に指すべし。行草の花形に至りては前後有り。

（除心真の花形図はテキスト613号6頁参照）

除心行の花形立様の事

左流枝の立様と云うは、心の梢、請の方へ行き過ぎたる時は、副の方かるきにより、その時は左の方へ流枝を付けかえ、心と張り合いするなり。又心に草などのかろき物を立て、請にお

第十八図
立花　松除真
除心の内行の花形　左流枝　筑摩九郎右衛門
松　晒　要　柏　杜若　百合　柘植
樫木　野春菊　著莪

左流枝

第十図
立花　松除真
除心の内行の花形　流枝持立　冨春軒
松　苔　百合　仙翁花　著莪　木槿
柘植　嫩　小羊歯　桔梗

流枝持立

もき物を立てる時も、左へ流枝を取りて、請と張り合わせて、軽重なきように立てるなり。

流枝持の立様と云うは、心の梢、瓶にのせず、副のかたをおもくなし、請にかるき物を立て、扨流枝は長く、おもき物を用いて、心と張り合いするなり。但し心より流枝へのうつり、心得あり。

中流枝立と云うは、請の出所高く、流枝との間遠き時は中より流すなり。又心の除、副の出所、控枝のふりによりて、中よりもながすなり。あしらい口伝有り。

請流枝立は、心しだれ物か、又は心の枝、請の上へさがり、請を高く出す事ならざる時は、請をひくく指し、その下枝を長く出して、流枝をかねるなり。されば一本を以て、請と流枝を

第十六図
立花　萱草除真
除心の内行の花形　中流枝立　寺田清左衛門
萱草　苔　松　桔梗　樫木　小菊
紫苑　著我　要

中流枝立

第十四図
立花　梅除真
除心の内行の花形　請流枝立　西村松庵
梅　苔　檜　水仙　千両　伊吹　樫木
枇杷　嫩

請流枝立

もたするゆえ、請流枝立と名づく。あしらいに口伝。

内副立と云うは、副の付くべき所に枝有り、或いは自然と副を持ちたる心有り、或いはみき異曲に狂いて、副のつかざる心には、心の内より副を付けるなり。あしらい口伝。

請あがり立と云うは、心の除ひくく、水ぎわより五六寸上にてのけたる時は、請にはしだれたる物を用いて、正心のもとより出すべし。柳薄花づる、連翹のたぐいなり。あしらい口伝。

請正心立と云うは、心水ぎわより除たる時は、請あがりとて竹を立て、笹にて請をもたせ、竹にて正心をあしらう故、請正心立と名づく。しかれども、請あしらい有り、正心あしらい有るべし。笹のしだれながき時は、流枝に心得有り。

第十二図
内副立
立花　松除真
除心の内行の花形　内副立　中野小左衛門
松　菊　小菊　梅擬　晒　樫木　嫩
沢桔梗

第九図
水際除
請上り立
（請正心立）
立花　松除真
除心の内行の花形　水際除・請上り立（請正心立）
中野五郎左衛門
松　梅　竹　水仙　柘植　ひさかき　樫木　枇杷

出逢い花（18）

仙溪

プロテアアイビー
薔薇

プロテアといえば、キング・プロテアのように、大きくて重量のある花をイメージするが、作例のような華奢な仲間もあったのだ。花屋ではプロテア・アイビーと呼ばれている。

プロテアの名前はギリシャ神話の神プロテウスからつけられている。変身する能力をもつ海神だが、南アフリカから熱帯アフリカに百十五種類のプロテアの仲間が分布しているとのことなので、このような小型種があっても不思議ではない。

花弁に見える薄紅色の総苞片には白い毛がはえていて、なんとも優しい感じである。この優しさを更に膨らませるような花は、と考えて深紅の薔薇を出逢わせることにした。

先日、相田みつをさんを特集したテレビ番組で、

「感動が人間を動かし、出逢いが人間を変えてゆくんだなぁ」

という言葉があった。私達が花をとり合わせるのは、客観的には「出合い」だけれど、花にとってはどうか、いけた花とその花を見る人との関係はどうかなどと考えると、「出逢い」の字を使うのがいいのではないかと思う。

常日頃、温かな愛を感じるいけばなでありたいと願っている。愛情をもって大切にいけると、花はそれにこたえてくれる。あらたな出逢いを。

小作

京の冬の旅協賛
京都名流いけばな展

河津桜の生花

＜11頁の花＞　仙溪

2月中旬から3月中旬にかけて、一足早く春爛漫の桜花を楽しむことができるのが河津桜だ。もともと伊豆半島の河津に咲いていた早咲き種だが、今年は各地で咲いた話しを聞いた。染井吉野の先発隊みたいなポジションだろうか。

はじめて生花にいけたが、枝は折れやすい。切り枝の場合、自然開花よりも花色は薄くなる。

③

大日如来さまに花を

仙溪

京都東山花灯路に紫木蓮の生花をいけた。場所は清水寺の参道にある眞福寺で、通りに面した大日堂では、大日如来座像を拝むことが出来る。この如来様は岩手県陸前高田の松でできている。7万本以上あった松原が津波で消失し、1本だけ残ったあの場所だ。沖へ流された内の700本が岸にもどったそうだが、鎮魂と復興の願いが込められて、大日如来像となった。

いけ込みは偶然にも東日本大震災から4年目の3月11日。被災地への思いを込めて、お祈りをさせて頂いた。

桑原専慶流いけばなテキスト622号　2015年4月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

華道人口

仙溪

ここ数年、いけばな人口が減ってきた、という話しをよくするようになった。その原因の一番目には、いけばなに魅力を感じられなくなってきたことが考えられる。

多くの人は日々の暮らしの中で、花がいけられているのをどれだけ目にしているだろう。家に花を飾る場所が無いともよく耳にする。花をいけない家庭で暮らしている人は、いったいどこでいけばなに触れられるだろう。

今でも質の高い料理屋には気の利いた花がいけられているし、オフィスビルのエントランスに花がいけられているところも無くは無い。かなり減ってはきたけれど、店舗のウインドーでいつも気になる花がいけられているところもあるにはある。

それでもそんな花に足を止める人は希なようだ。みんな心に余裕がなくなってきたのだろうか。いけばなに魅力を感じられなくなってきたのは、魅力あるいけばなが少なくなっているのかもしれないが、それよりも魅力を感じる余裕がなくなってきたのではないか。

科学技術の進歩と共に、人の暮らしもせわしなくなってきた。便利なものがつくられると、時間をかけてじっくりつくることがなくなり、手塩にかけてとか、丹精こめてとかいう価値観が忘れられようとしている。しかし一方ではこれではいけないと思う人も増えつつあるようにも思う。

さて、華道人口を増やすにはどうすればいいだろう。自分自身がいけばなに興味をもちはじめた時の事を思い出してみる。ウィンドーの一輪挿しに目がいくようになったのは、いけばなを見る目が変わったのは、父がいけた花を見て「こんなんいけられたらいいな」と思った時からだった。

そう考えると、いけばな復興のきっかけは、人といけばなの「出逢い」が鍵になると云えないだろうか。花道人ひとりひとりが、周囲の人にその出逢いを提供すればいい。肝心なのはその出逢いが心のこもったものであること。一番はやはり誰かにいけばなを教えてあげるのがいい。職場に花をいけるとか、最新のツールを駆使して花の写真を多くの人に見てもらう、なんてこともありだ。

ここでもやはり「感動が人間を動かし、出逢いが人間を変えてゆくんだなぁ」である。

ネリネ三色

＜12頁の花＞　櫻子

ネリネの赤、白、ピンクは好きな配色だが、それぞれの分量によって印象が違ってくる。雪柳が加わることで、強い赤色が可愛く感じられる。ポトスの緑の濃淡も気に入っている。

花材　ネリネ三色（彼岸花科）
　　雪柳（薔薇科）
　　ポトス・ライム（里芋科）
花器　赤色ガラス鉢

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
5月号
No.623

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

緑から白へ

＜表紙の花＞　櫻子

紫陽花（あじさい）にも近い植物で、日本の山野にみられるガマズミや大手毬（おおでまり）の仲間であるビバーナム・スノーボール。ビバーナムには他にも種類があるが、葉の先が3つに裂けているのがスノーボール。

咲きかけのつぼみの頃は若草色の花の固まりだが、真っ白へと変わっていく。柔らかくてフワフワの花で、姿も優しいので出逢えるこの季節が待ち遠しい。

水揚げは良くないので、ライラックなどと同じように足元を削ってよく割り、水切りしてたっぷりの水につける事。花が下向きだが、ちゃんと元気に咲いている。最後は本当に雪の玉のようになって、はらはらと花びらを散らす。紫陽花よりも繊細で頼りないけれどやっぱり好き。オランダ製のガラス器にバンダと取り合わせた。

花材　ビバーナム（忍冬（すいかずら）科）
　　バンダ（蘭科）
花器　淡紅紫色ガラス花瓶

ライラック

＜2頁の花＞　櫻子

四月末に岡山の桑原専慶流展に行くと必ずと言ってよいほどライラックをいけておられる。庭に咲いたライラックを切ってこられるので、大

きく伸びやかで良い香り。いつも羨ましく拝見している。

ヨーロッパ原産で、フランスでもよく庭に植えられている。フランス語ではリラ。シャンソンにも「白いリラの咲く頃」があり、宝塚歌劇の「菫の花咲く頃」はこの曲が元になっているそうだ。

ドイツやフランスでお世話になった方の庭にはライラックとともに薔薇や蔓薔薇も必ず植えられていた。ともに芳しい初夏の花だ。

花材　ライラック（木犀科）
　　薔薇2種（薔薇科）
花器　青色ガラス花器

アルストロメリア４色

＜3頁の花＞　仙溪

はじめてアルストロメリアを見たときの印象は「鬼のパンツ」だった。花弁の縞々模様は虎を連想させる。

昆虫はこの模様を目印にして蜜を吸いに来る。このような模様を蜜標と云うそうだ。ここに蜜があります よというサインの役目だが、言いかえれば蜜屋の看板。客の昆虫に蜜を提供し、かわりに花粉を運んでもらう約束ができている。

作例は、アルストロメリアをカラーの足元に低く集めて、水辺のサツキのような感じにいけてみた。

花材　カラー（里芋科）
　　オクロレウカ葉（菖蒲科）
　　アルストロメリア（百合科）
花器　紺色釉陶鉢（フランス製）

初夏籠花

櫻子

宝鐸草（ほうちゃくそう）を庭から切ってきた。鳴子百合に似た花の付き方で、百合科・稚児百合（ちごゆり）属の多年草。水揚げもいい。

花屋で初夏の草木を買い足して籠にいけた。白い小さな花は姫空木（ひめうつぎ）。花が2本立つのは二人静（ふたりしずか）。淡紫色は都忘れ。野に咲く姿を想像しながらいけるのは楽しい。繊細な籠花生けには優しい風情の花が似合う。

立華時勢粧（りつかいまようすがた）を読む ⑫

立花秘傳抄　五

除心行の花形立様の事（つづき）

先に紹介した七つの除真（除心）行の花形図（テキスト613号、622号）は「立花時勢粧　上」から引用している。「立花秘傳抄　五」の文章にあわせて絵図を紹介してきたが、「立花時勢粧　上」にはさらに五点の除真行の花形図があるのでここに掲載しておく。

除真行の花形には特徴のある花形がいくつかあるので、原文の順番に、絵図と照らし合わせながら解説してみよう。

左流枝（ひだりながし）

真の梢（こずえ）が請の方へゆきすぎた場合、副の方が軽くなるため、左の方（真・副の方）へ流枝をつけかえて、真と張り合いをもたせる。

また、真に草などの軽いものを立てて、請に重いものを立てる時も、左に流枝を出して請と張り合わせる。

前号の第十八図では松の真が中心よりも右へ伸びていて、さらに見越、請ともに右へ大きく出ているため、流枝は松を

第十九図
立花　薄除真
除心の内行の花形　左流枝立　林昌
薄　菊　松　梅擬　熊笹　柘植　小菊
夏はぜ　小柏　著莪

左流枝立

第十一図
立花　梅除真
除心の内行の花形　流枝持立　桑原次郎兵衛
梅　枇杷　松　柳　柘植　千両　椿
水仙　嫩　狗子柳

流枝持立

左に低く長く出すことでバランスをとっている。

今号の第十九図は逆勝手で、右に立ち上がった薄（すすき）の真に対して、請には重みのある松を立てている。請の松は枝先が中心近くへもどって真の軽さに配慮しているが、さらに流枝の松を真側（逆勝手なので右方）へ長く出して左右のバランスをとっている。

文章には左流枝にした場合の控枝の扱いについて書かれていない。流枝と交換で請の下に出すのが一般的な考え方だが、もともと控枝は七つ道具（七つの役枝）からは外れており、控枝の無い花形もあってよいとも書かれている（後に紹介する立花名目の解説より）ことからしても、臨機応変に考えればいいだろう。

流枝持立（ながしもちたて）

真の梢を花瓶の真上にのせない（中心へもどさない）ために、副の方が重くなって請に軽いものを立てた場合、流枝に重いものを長く出して真と張り合いを持たせる。

前号の第十図では松の真に対して松と吾木の流枝、今号の第十一図では梅の真に対して流枝には梅を伸ばし、さらに柘植と松を添わせている。

中流枝立（なかながしだて）

中流枝立とは、請の出口が高い時に、流枝を中程（なかほど）から出す花形で、真の除（のき）、副の出所、控枝のふりによっても中程から

第十七図
立花　松除真
除心の内行の花形　中流枝立　寺田八郎兵衛
松　晒　百合　枇杷　柘植　紫陽花
要　小菊　檜扇

中流枝立

第十五図
立花　柳除真
除心の内行の花形　請流枝立　谷久兵衛
柳　梅　松　千両　柘植　嫩　枇杷
水仙　狗子柳

請流枝立

流枝を出す。

前号第十六図ではおそらく色彩的な考慮がなされて、萱草の真と見越に対して、請の桔梗を高いところから出している。請の下が大きく空くので、流枝の松を胴の中程から出して枝先を下げている。

今号第十七図では、真の形と、水際からうけるように出た控枝にあわせて、控枝の出口よりも高く、請のすぐ下から流枝を出している。

請流枝立

真が枝垂れるものだったり、真の枝が請の上へ下がっていて請を高く出せない時、請を低くさして、その下枝を長く出すことで流枝も兼ねさせる。これを請流枝立と云う。

前号第十四図では檜、今号第十五図では松がそれぞれ請と流枝を兼ねている。そしてその下に晒木や水仙の葉を水際からあしらいとして加えている点にも注目したい。

第十三図

立花　松除真

除心の内行の花形　内副立　中野宗左衛門

松　苔　梅擬　菊　伊吹　柘植　小菊

檜扇　樫木　狗子柳

内副立

※絵図の番号は原本の掲載順による。

※参考文献

『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）

『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

内副立

本来の副の位置に副を出すのが困難な時、真の内側に副をつける。

前号第十二図では真の松が一度外側へ下がってから立ち上っているため、副は真の内側に梅擬を出している。

今号第十三図では真の松の分かれ枝が前へ枝垂れているので、それを生かすために副は内側に出されている。この内副は大きく中心を越えて請の外側へなびかせた特徴ある形で面白い。

水際除

真が水際近くから除く。（文中に特に説明はない。）

請上り立

真が低い位置から除く時、請には枝垂れるものを正心の元から出す。

６１３号に掲載した八図も請上り立である。真の出所は高いが、梢が請の方へ張り出しているので、請に枝垂れるものを立てている。逆に副は上へはねあげてある。

請正心立

水際除の真で、請上りとして竹を立てた場合には、中心に立てた竹を正心と見なし、請正心立と呼ぶ。

前号の九図がこれにあたる。竹の前に正心あしらいとして水仙が入っている。大きく垂れた笹の内側に流枝がうまくおさまり、副の梅が立ち上り、控枝は省略されている。本来の請の位置に梅のあしらいがのぞく。

松真立花

花形　除真行・左流枝

花材　松　真・副・流枝・胴

躑躅　請・前置

菊　正真

晒木　見越・控枝

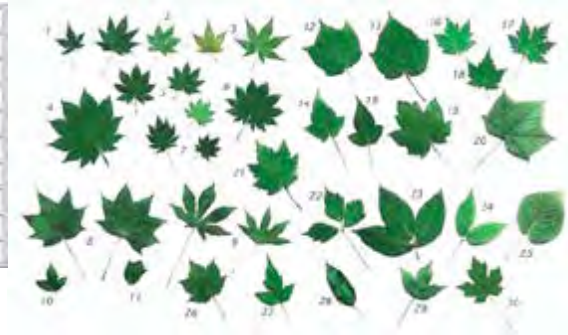
嚊子百合　あしらい

第 66 回 華道京展 「粋（すい） いけばな美のかたち」 4 月 16 日㈭～ 21 日㈫ 大丸ミュージアム〈京都〉

カエデの見分け方

９頁の楓（かえで）は、日頃イタヤカエデと呼んでいるが、正確にはハウチワカエデだと思う。
そこでカエデの識別方法として、葉の形とその名前を参考に紹介する。

1	イロハモミジ	11	タイワントウカエデ	21	オガラバナ
2	ヤマモミジ	12	ウリハダカエデ	22	ミツデカエデ
3	オオモミジ	13	ホソエカエデ	23	メグスリノキ
4	ハウチワカエデ	14	ヤクシマオトギカエデ	24	チドリノキ
5	コハウチワカエデ	15	ウリカエデ	25	ヒトツバカエデ
6	オオイタヤメイゲツ	16	ミネカエデ	26	アサノハカエデ
7	ヒナウチワカエデ	17	ナンゴクミネカエデ	27	カラコギカエデ
8	イタヤカエデ	18	コミネカエデ	28	クスノハカエデ
9	エンコウカエデ	19	カジカエデ	29	ハナノキ
10	トウカエデ	20	テツカエデ	30	クロビイタヤ



林田 甫（はじめ）様のホームページ「カエデともみじ」より転載
http://mohsho.image.coocan.jp/report7.html

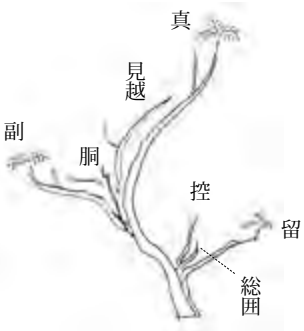
華道京展　仙溪

笠松真の立花（前期）

真の枝は直立した笠松の下に左右に枝がでていたので、それらを生かして大きな真とし、下半分に残りの役枝を配した。松と石楠花だけで立てた立花。花器は銅立花瓶。

七竈の生花（後期）

大きな蛇の目に大きな又木を使用。自然の曲がりを生かした真に他の枝を添わせている。花器は阪野鳳洋作の陶深鉢で岩のような口辺のつくりに自然美を感じる。



桑原専慶流いけばなテキスト623号　2015年5月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（19）

仙溪

雪餅草
美女撫子

雪「おいらの頭とあんたの頭と、色がよく似てますねぇ」
美「あたしの方がいい色だわ。でもあなたの白い縦縞はいかしてる」
雪「いやー嬉しいなぁ、自分でも気に入ってんだじつは。おいらの仲間はみんなよく似てるもんだから、ちょっと個性的にしとかないとね」
美「首のあたりはピンストライプね、オシャレだわ～」

今月の出逢い花は雪餅草の相手を探すうちに、この珍しい撫子に出逢った。土っぽい器に立てると、二人（二本）で岩風呂につかっているようで、勝手に会話を想像してみた。

雪餅草は三重、奈良、四国に分布する里芋科・天南星属の多年草で、肉穂花序の先が白く膨らんで、餅をのせているように見える。切り花にしても水揚げがいい。

この撫子の品種名はブレアンサス・クイーン。美女撫子（別名、髭撫子）の園芸品種である。美女撫子はヨーロッパ原産だが、アメリカ経由で日本に来たためアメリカ撫子とも呼ぶそうだ。なんともややこしい。最近よく見かける緑の苔玉のような手毬草も美女撫子の改良品種。

見知らぬ男女の混浴のようにも見えてくる。格好つけつつ緊張する雪餅草と、のんびり寛ぐ美女撫子。花たちの会話を想像するのも楽しい。

花材　雪餅草（里芋科）
　　美女撫子「ブレアンサス・クイーン」（撫子科）
花器　焼締花瓶

レモンだより

レモンちゃんは花をいけていると、じっと横で見ていたりする。なにか大切なものらしいことが分かるのか、いけた花を倒すことは今のところない。

家の出入りは自由だが敷地から外へは出ない（おそらく）。まれに路地の先までついてくる時も、外へは決して出ないし、大概は写真の位置でストップ。忘れものを取りに帰るとまだじっと見ていたりする。外出から帰った時に足音に気付いて出迎えにきてくれたりすると、もう、あれですな、嬉しいもんです。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
6月号
No.624

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

「水生華」

この度、縁あって陶芸・美術作家の近藤高弘さんと、当流副家元の桑原櫻子との二人展を「冨春軒」で開催させていただいた。

近藤さんは京都清水で磁器の染付で人間国宝となられた近藤悠三氏の孫にあたり、伯父様の近藤豊氏の死去を機に陶芸の道に入られた。制作にあたっては「水」を常に意識されて、水滴を表した「銀滴」シリーズで独自の境地を開拓してこられた。

櫻子は京都で330年の歴史をもつ花道・桑原専慶流の14世家元の長女として、幼少より花の道に携わる一方で、料理研究家としての顔ももち、自然の恵みと美しさを伝える活動を続けている。

今回の「水生華」では、近藤さんの「水」をテーマにした作品群が、和の暮らしの中でどんな反応を見せてくれるのか、そこに「華」が加わることで何が生まれるのかを体感する中で、アートについて、花道について、深く考える機会を得ることができた。

「水生華」の余韻を今後に生かすため、写真と文章で記録に留めたいと思う。

「水生華（すいしょうか）」特集

水の町家に　風を感じて

会場となった「冨春軒」は花道の道場であり、花道家元の住居でもある。祖父の代で花を養う細長い水溜が土間につくられ、父と母の代で水溜は3つに増えて、季節の葉や花を浮かべるようにしている。

今回、近藤高弘さんはこの家を「水の町家」と表現してくださった。日頃とくに意識していなかったが、言われてみると「水」を生かして暮らしていることに気付く。母がうるさく花の水換えの大切さを言ってく

近藤高弘　ガラス・インスタレーション　　桑原櫻子　花：黄金板屋楓（おうごんいたやかえで）　鉄線数種　八角蓮（はっかくれん）　白花敦盛草（あつもりそう）

れていたことも、「水の町家」の要素になっていると思う。

二階の上段の間は一尺だけ高くなっている。そこがタイトル「水生華」の舞台になった。氷のような、雪のような作品を近藤さんが配置していく。「僕の作品を水だと思って花をいけてください」との投げかけに応えて、季節の自然を櫻子がいけていく。

そして「水の器」と花たちが明かりに浮かび上がる。

このイベントには、近藤さんの推薦で、現代アートの旗手の一人、大舩真言（おおふねまこと）さんにも協力をお願いし、一階の2つの床の間に大舩さんの絵が加わった。

表紙掲載の絵は深い青色に縦に白い筋、9頁の絵は淡い青色にぼんやりと横に白い帯。事前に床の間を見に来られて描いてくださったもので、材料は天然岩絵具である。空間にも近藤さんの器にもぴたりと調和していた。

その床の間に櫻子が花をいけた瞬間、見ていた大舩さんは「風」のようなものを感じたと、後で教えて下さった。そんな風を自分の作品にも吹かせたいと。

「命は水から生まれいずる」水から生まれいずる華。水生華。近藤さんの水の表現は、水の町家を潤し、櫻子の生けた花たちは、水を得た命の美しさを見せて、人の心に風を送ってくれた。家と器と花と絵とが心地よく響き合った。

桑原専慶流十五世家元　桑原仙溪

「水生華」　桑原櫻子×近藤高弘

日時：5月9日(土)・10日(日)　11時～17時

場所：冨春軒［桑原専慶流家元宅］

入場料：500円

近藤高弘　坐像：Reduction - 滝 -　　桑原櫻子　花：乙女百合　　屏風：山田古香筆「赤壁の賦　前編」

階段を上がった二階、上段の間が「水生華」の舞台に。

近藤高弘　器：Mist」　桑原櫻子　花：有馬の馬の鈴草

瞑想　（4頁）

玄関の間で迎えるのは、滝に打たれて瞑想する坐像。組まれた手の上で可憐に咲く乙女百合。震災と原発事故を経て、人と自然との関わりを問い直す近藤さん自身の姿に、東北ゆかりの花が寄り添う。

屏風に書かれているのは中国・宋代の詩人、蘇軾（蘇東坡）が、長江の戦場趾を訪れ、人の儚さ愚かさと、自然の雄大さを対峙させた韻文。

文字の滝の前で、人と花とが一つになる。

Tradition and Modernity: "*Suishoka* (Water, Life, and Flowers)"

Takahiro Kondo, ceramic artist

Kyoto often makes me feel and consider its deep and essential traditions that have been passed down for generations. Such an encounter with traditions is very inspiring for me, as I am always seeking new and modern ways of expression, and it drives and motivates me to create art standing face-to-face with each key element of such traditions. While it is often said that Kyoto is a city of "traditions and innovations" , I believe that innovations only come from authentic traditions that live on in the historical city and not from those that appear to be traditional on the surface.

It was two years ago that I first visited Fushunken, the house of Mr. Kuwahara, the Grand Master of the Kuwahara Senkei School of Ikebana. After going back and forth along the Rokkaku Street, I finally found and entered Fushunken' s front gate. I walked down a long and narrow path, when suddenly, I saw flowers floating in a small stone pond glowing in the sunlight. At that moment, it felt as if my entire body was taken into a completely different dimension. I was also impressed by the greenness of maple leaves in another pond near the front door, and I instantly thought that this place is a "*Machiya* of Water" . I was also amazed by the inside of the *Machiya* where the space and atmosphere were created meticulously with fine materials including lamps and shades of discerning taste, and flowers in vases of different materials, colors and shapes. When I saw the upstairs salon used as a room for learning *Ikebana*, I thought that "the students here must be very lucky to have the opportunity to learn *Ikebana* in such a place."

At the age of 25, I left the company employment in Tokyo and decided to start my career as a ceramic artist, driven by the shocking death of my uncle Yutaka Kondo (ceramic artist) who took his own life. Up until then, I was an athlete, a table tennis player, and had little interest in art, and it was only when I came back to Kyoto that I started learning ceramics and art from the beginning. It was around the age of 30 when I acquired the minimal standard of the basic ceramic skills and techniques I needed for my work. However, I had been struggling for a long time to find my own unique theme for my art. Around 1994, when Kyoto commemorated the 1,200th anniversary of its foundation, I came up with the idea of "fusing contradictory elements" inspired by the city of Kyoto where old and new elements are all mixed and combined. Then, I began to create my artworks with the keyword of "representation of water born from fire (kiln) through earth" , based on the image of **fire** and its opposite, **water**, which are both essential elements of ceramics. Since then, I have been working on various expressions of water using glass and *Gintekisai* (silver mist overglaze), my original patented technique.

When Mr. Kuwahara asked me if we could create some kind of exhibition at *Fushunken*, it was easy for me, whose main theme is water, to visualize the installation of artworks in this *Machiya*. Accordingly, we collaborated to create this exhibition and demonstration of *Ikebana* (*Hanademae*) with the concept of "*Suishoka* (Water, Life, and Flowers)" . This event was also a part of "PARASOPHIA: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015" the first international art festival in Kyoto, and was held on the last day of the art festival. I believe we have succeeded in presenting some of the interesting aspects unique to Kyoto where tradition and modernity integrate. The number of foreign tourists visiting Kyoto continues to rise every year, and I think that it will become increasingly important to introduce our culture through the presentation of Japanese aesthetics and sensibility from Kyoto to the world.

The devastating earthquake that hit Japan in 2011 made us, the Japanese people, reconsider our way of living and the relationship between nature and the human. In our hectic daily lives, we sometimes forget about simple and natural things such as a flower (life) living in **water**. However, there is sometimes a brief moment where you realize that nature, body and soul have become as one; for instance, when you are arranging flowers in a vase, or for me, when I am working with clay and fire. I want to cherish such momentary feeling and let them permeate every cell of my body.

Takahiro Kondo

1994 Kyoto City Emerging Artist Award.
2002 supported by Japanese Ministry of Culture grant for overseas study.
Public Collections
Metropolitan Museum of Art,N.Y.
National Museums of Scotland,Edinburgh etc.

Sakurako Kuwahara

Born in Kyoto as the first daughter of the Grand Master of Kuwahara Senkei School whose history dates back to the 17th century, Sakurako has learned *Ikebana* since the age of six.
Currently, teaching *Ikebana* as the Vice Grand Master, she also runs the cooking salon "Cherry Kitchen" .

翻訳：佐藤美奈子

伝統と現代　　近藤髙弘

京都は、深く本質的な伝統が脈々と流れていると体感することがある。現代の新たな表現を模索してきた私にとって、それは、とても刺激的な出会いであり、そこからその重要な要素のモノやコトと対峙しながら、制作へと向かう意欲へと駆り立てられることがある。　京都が、「伝統と革新」の都とよく言われるが、うわべだけの伝統的なものではなく、本当の伝統が息づいているからこそ、革新が生まれるのだと思っている。

さて、ご縁があって桑原さんと知り合い、２年前に初めて冨春軒におじゃまさせていただいた。六角通りで何度か入り口を通り過ごしてしまい、やっと見つけて長い路地を入っていくと、パッと光がさし水のはられた石囲いの中に迎え花が浮かべてあった。その瞬間、私はまったく異次元の世界に引き込まれたような感覚が身体に走ったのを記憶している。そして、次に中玄関でも水の中に沈められた楓が青々としているのが、また印象的でその時、ここは「水の町屋だ」と思った。家の中にも、様々な花器に花が生けられ、またセンスの良い照明器具など、細部にこだわった素材や空間造りがされている町家に驚くとともに、２階大広間が、お花のお稽古場になっていることを見せてもらって、「ああ、ここでお稽古される生徒さんたちは、なんて幸せなことだろう」と、思った。

私は、叔父（陶芸家・近藤豊）の自死の衝撃で、２５歳の時に東京の会社を退職して、この道に進むことを決めた。スポーツ選手（卓球）だった私は、若い時は美術にはほとんど興味がなく、京都に戻ってから陶器やアートのことなど一から学ぶこととなった。３０歳を過ぎてようやく、何とか基本的な技術は身に付き始めたが、個人作家としてどのようなテーマで自分独自の作品を作っていくのかという暗中模索が続いていた。ちょうど１９９４年京都が建都１２００年の年を迎えるころ、古いモノと新しいモノが混然一体となっている京都の町を客観的に捉えることで、「相反する要素を融合する」というテーマが生まれ、その後、焼きモノの重要な要素である「火」と対極にある「水」をイメージし、「土を媒介に火（窯）の中から生まれる水の表象」というキーワードを素に、作品を制作するようになった。そこから、銀滴彩のオリジナル技法（特許取得）やガラスなど水をテーマに様々な表現を試みている。

桑原さんから、この冨春軒で「何か展覧が出来ませんか」という打診をいただいた時、水をテーマにしてきた私にとって、それは、直ぐにこの町家での展示イメージが拡がり、今回の「水生華」というコンセプトも生まれ、コラボレーションの展覧会と華手前というイベントが実現した。丁度、京都国際現代芸術祭２０１５「パラソフィア」という京都で初めての国際アート展が開催されている、その最終日に合わせての関連イベントということにも連携でき、京都でしかできない伝統と現代が融合する面白さの一端を提示できたのではないかと思っている。

年々、京都には多くの海外からの観光客が増え続けているが、京都から日本人の美意識や感性を世界に伝えることは、今後益々重要な文化発信となるであろう。

２０１１年３・１１の災害と事故を経験した我々日本人は、改めて自らの生き方や自然と人間の関係を考えさせられる大きなきっかけとなった。「水」に生きる華（いのち）という当たり前の事に、つい日常に追われて忘れてしまうことも多いが、たとえば、花を生けるという行為や時間、私であれば、土や火に向き合って制作しているときに、ふっと立ち現れる自然と身体と魂の一体感の余韻に気が付くときがある。そんな瞬間の感覚を大切にして、その一瞬を自らの細胞の中に染みわたらせたいものである。

近藤髙弘　器：銀滴彩器　　桑原櫻子　花：薔薇　板屋楓　　大船真言　絵：「STILL WAVE #7」

華手前

近藤さんの銀滴碗を使った少人数での茶会を行って、櫻子による華手前をご覧頂いた。

水を打った路地を入り、庭をめでてお茶室へ。はりつめた空気の中に、亭主が花を切る鋏の音が心地よく響く。季節の花のみずみずしさが、部屋の空気を優しくしてくれる。

謙虚な心で、精一杯のもてなしの演出を。亭主の気持ちを花がかわりに伝えてくれる。なによりも花をいけた櫻子が感動していた。花道の本質に触れたのだろう。

櫻子が選んだ花は朱鷺芍薬と斑入葉の紫蘭。折り鶴に似た器に乗って空を飛んでいるようだ。

お茶は冷煎茶。使われた水は近藤さんが大峰山から持ち帰って下さった「ごろごろ水」。菓子は「青洋」青山洋子さんがこの日のために作った「潤」。丁寧に削られた青竹の楊枝を添えて。

桑原専慶流いけばなテキスト624号　2015年6月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

近藤髙弘「雫」　桑原櫻子　花：金鎖

水生華を終えて　櫻子

近藤さんの銀滴碗を初めて拝見して手に取った時、零れ落ちる様な水滴が表現された美しき器に驚きました。

自然が生み出す一瞬の造形のような姿が銀の滴となって表れ、焼きものとして完成されていました。

今までに見たこともないような作品でした。

ガラスインスタレーションも溶けていく氷に見立てた作品でした。

儚く溶けて追いかけても追いかけても消えていく美しい雪の結晶。

どんな花が似合うかしら。

この器のように繊細で、出逢う事の少ない特別な花。敬意と愛情を込めていけたいと思う。

ずっと想い描いていた夢を実現出来た三日間でした。

氷達に包まれて、木や花達がしなやかに力強く咲いてくれました。

水生華に関わって下さった方々の想いが、花と器と家を生き生きと輝やかせたのだと思っています。

＜表紙の写真＞

近藤髙弘　器：氷裂

桑原櫻子　花：薔薇二種

大舩真言　絵：crevasse

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
7月号
No.625

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

出逢い花（20）
レオントキール・オバレイ

＜表紙の花＞　仙溪

レオントキールとは「ライオンの手」という意味だそうだ。この花の蕾を写真で見たが、確かにライオンの手に見える。

南米原産でアルストロメリアの仲間だが、地面を這うか、もしくは蔓で育つ。作例のレオントキールは湾曲した太い茎の先に、深紅の花が球状に集まって咲いていた。

さて、何といけようか。実ができたばかりの山帰来（さんきらい）は、明るい緑色の葉が初々（ういうい）しい。見た瞬間に出逢わせたくなった。

今回も敢（あ）えて水際が見えるようにいけてみたが、不思議な一体感が生まれてくれた。そしてそれぞれの個性がはっきりと見て取れる。互いに1本ずつの出逢い花ならではの面白さだと思う。

花材　レオントキール・オバレイ（百合科・彼岸花科・アルストロメリア科）
山帰来（百合科）

花器　濃青色陶花瓶（谷口良三作）

えんどう豆
ベル鉄線

＜2頁の花＞　仙溪

2頁の写真は5月初旬の撮影で、え

んどう豆の園芸種だと思うが、宿根スイートピーもこのようにいけられる。

春のスイートピーが一年草で、その花だけが出荷されるのに対して、初夏に蔓のまま出荷される多年草のスイートピーを宿根スイートピー、またはサマースイートピーと呼んでいる。

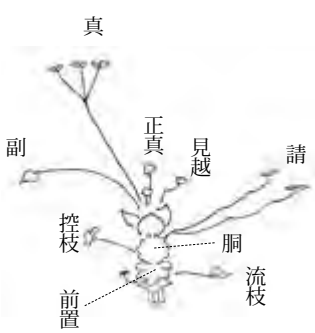
枯枝を固定しておいて、豆の蔓をからませ、ベル鉄線を根締めに加える。

花型　二種挿し　草型　副流し
花材　宿根スイートピー（豆科）
　　ベル鉄線（金鳳花科）
花器　盃型ガラス花器

立花研修会の花

＜3頁の花＞　仙溪

燈台躑躅（どうだんつつじ）　真・請
土佐水木　副
躑躅（つつじ）　見越
芍薬（しゃくやく）　正真
紫陽花（あじさい）　控枝・胴
鳴子百合（なるこゆり）　流枝・前置
擬宝珠（ぎぼし）　大葉かこい
撫子（なでしこ）　あしらい



立華時勢粧（りつかいまようすがた）を読む　⑬

立花秘傳抄　五

（除真）草の花形立様の事

草の花の立ようと云うは、前の六つの花形を、よくよく修練して後、かれこれをかよわしまじえて、或は直心立にして、流枝立あり、或は請あがり立にして、左流枝あり、内副にして、流枝持あり、水際除にして、中流枝立と、さまざまに作意をめぐらし、日々に新たに、瓶ごとにあらたにして、七つの枝よくそなえ、法度指し合い、古法を背かず立てるなり。

初心の内は、花形かゆること成しがたし。これを名付けて、いろは立、板木花とて嫌うなり。たとえば古歌を吟じて、楽とせんよりは、秀歌を詠むにはしかじ。

（・・しかじ＝・・に及ぶまい。・・にまさるものはあるまい。）

立花時勢粧上には11作の除真草の花形図がある（すでにテキスト613号で1作を掲載）。その内ここでは冨春軒作の2作を掲載する。枝や花、葉や実の絶妙なバランス感覚を読み取ってほしい。

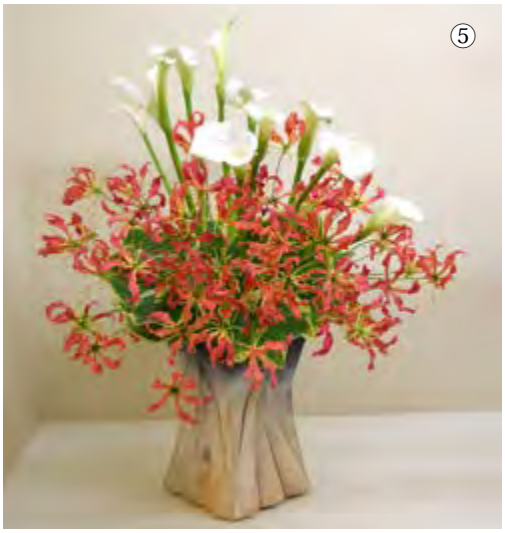
第二十一図
立花　松除真
除心の内草の花形　冨春軒
松　梅　苔　椿　柘植　水仙　伊吹
晒木　枇杷　嫩　著莪

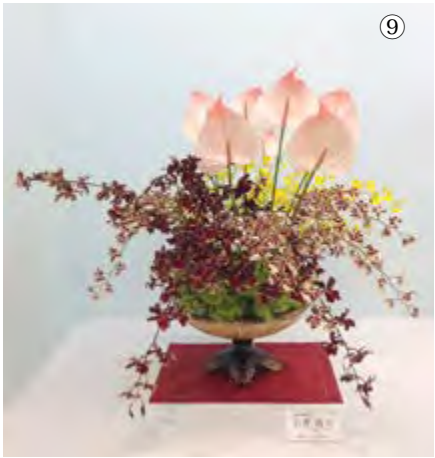
第三十図
立花　梅擬除真
除心の内草の花形　冨春軒
梅擬　柏　菊　小菊　椿　熊笹　伊吹
嫩　樫木

日本いけばな芸術中国展

会期　5月20日(水)～25日(月)

会場　そごう広島店





日本いけばな芸術中国展

会期　5月20日(水)～25日(月)

会場　そごう広島店

①

②

七竈生花

仙溪

日本いけばな芸術
中国展出品作

花型　生花　二種挿し
花材　七竈（ななかまど）　鉄線
花器　御砂焼（おすなやき）花器

私と上野淳泉先生（日本いけばな芸術協会・特別参与）は広島の「御砂焼」に花をいけた。

御砂焼は宮島焼とも神砂（しんしゃ）焼ともいい、古くから厳島（いつくしま）神社参拝の際の縁起物として焼かれてきた。宮島の砂を粘土に混ぜて焼かれる。

私がお借りしたのは直径が30センチもある大きな器で、今回の花展のために特別に作られたもの。事前に器の写真を見て何をいけようか考えた。

花フジさんが用意してくれたのは見事な七竈。写真の水際で直径10センチ近くある。家でおよそのところまでさばき、新幹線でなんとか広島へ。花器におさめるのに手こずったけれど、ピタッと立ってくれた。

御砂焼が気に入ったのか、たっぷりの水が気に入ったのか、七竈は元気に葉をひろげてくれた。逞しく屈曲した幹には、過去にどんなドラマがあったのか。

桑原専慶流からは23名の出品だったが、岡山の先生方の「いい花をいけよう」という意気込みが嬉しかった。いろんな意味で、思い出に残る素晴らしい経験となったことに感謝している。

季節の洋と和

櫻子

カットガラスにいける

＜10頁の花＞

花材　向日葵（菊科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　ヒペリカム（弟切草科）
花器　カットガラス花瓶

宗全籠にいける

＜11頁の花＞

花材　竹島百合（百合科）
　　珍至梅（薔薇科）
　　下野（薔薇科）
　　岡虎の尾（桜草科）
花器　宗全籠　手なし

10頁のガラス花瓶は口が広く、厚みがあってかなり重い。このガラス花瓶も11頁の籠も、どちらも夏むきの涼を感じる器だが、一方は重量があり、一方は軽いので、おのずといける花もそれなりのものを選びたい。

ガラス花瓶にはアクリルの石を入れ、剣山を使って重厚な感じにいけている。大好きな八重咲きの向日葵を主材に、臙脂色のアンスリウムと赤い実が可愛いヒペリカム。色の組みあわせを楽しんだ。さらに、明るい緑色を加えたくて、アクリル製のランチョンマットを敷いている。

宗全籠は江戸時代前期の茶人、久田宗全が作った置籠で、本来は篠の手が

付いている。籠の中では安定がいい方なので、竹島百合もしっかり受け止めてくれる。その足元には軽やかな珍至梅、下野、岡虎の尾を選んだ。籠の雰囲気に合わせて野趣を感じる花で統一している。

両方の写真を見比べてみる。花器はそのままで、左右の頁の花だけを入れ替えたところを想像してみると、どちらも微妙な違和感を感じてしまう。重量的なバランスだけではなくて、自分が表現したい雰囲気との違和感。

表現したいものが何なのかがはっきりしていれば、それにあった器を選ぶべきだし、花材のとり合わせもそれに随えばいい。洋花・和花という区別よりも、花の風情を統一することを心がけたいと思う。なかなか難しいけれど、とても大切なこと。

レモンだより

寝場所はどこでもいいわけではないらしい。彼なりのこだわりがある。

桑原専慶流いけばなテキスト625号　2015年7月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

竹取物語

仙溪

ピンクのカンパニュラがあまりに可愛かったので、庭の篠竹（しのだけ）で囲むようにいけて、かぐや姫みたいだなぁと一人悦（えつ）に入（い）っている。

光が透けて見えるようなピュアな花である。蛍袋に感じる野の風情とは違う、はつらつとした美しさ。青いガラス花器にいけると、宇宙空間で咲いているようだ。その雰囲気をこわさないように、篠竹のいけ方を工夫している。

花材　カンパニュラ（桔梗科）
　　篠竹（稲科）
花器　ガラス花器

事故から4年4ヶ月

仙溪

インターネットができる人は是非「チェルノブイリ・ハート」という短編ドキュメンタリー映画を見てほしい。私はＹｏｕ・Ｔｕｂｅで見つけて見る事ができた。

１９８６年に起こったチェルノブイリ原発事故が子どもたちに与えた放射能被害の実態を、事故発生から16年後に描き、２００３年米アカデミー賞短編ドキュメンタリー部門でオスカーを受賞している。約40分、日本語の字幕がつけられている。

こういう話をいきなり日常の中でするのは難しいので、ここに書かせて頂いた。ネットの世界には妖しげな情報が散乱しているが、監督のマリアン・デレオさんに深い人間愛を感じたので、私はこのドキュメンタリーで見たことが現実なのだと信じている。情報の見きわめに、発信者の人柄は重要な判断材料だと思っている。人を思いやる心を感じるかどうか。見て感じて、共に考えたい。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
8月号
No.626

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

為朝百合

＜表紙の花＞　櫻子

「立華時勢粧」には花材について詳しく解説されていて、その中に為朝百合も出てくる。そこには「為朝百合。鬼ゆりに対して名付く。富士ゆりとも、うたゆりとも所に替わりて名異なるなり。」と書かれている。為朝とは平安時代末期の武将、源為朝のこと。鬼にも勝る鎮西八郎為朝の勇ましさにあやかった命名だろうか。

現在の植物図鑑で調べると、タメトモユリは伊豆諸島に咲くサクユリのこととある。とても大きく咲く百合で白色大輪のカサブランカの母種らしい。源為朝は伊豆に縁があるためそう呼ばれてる。

しかし、現在京都で為朝百合と呼んでいるのはサクユリではなくて表紙にいけた百合をさす。黄色い帯に赤い斑点はヤマユリに似ている。おそらく古くからヤマユリの一種を京都周辺で栽培し、為朝百合と呼んでいたのだろう。この百合の美しさと風格は、人気絶大な人物の名をつけるのに相応しいと思う。

為朝百合の名がつけられた二つの百合。豪傑の武勇伝を語り継ぐということも、今ではなくなりつつあるけれど、花を通して古の時代の空気を想像するのは面白い。いつか伊豆諸島の為朝百合にも会いに行ってみたい。

花材　梅花躑躅（躑躅科）
　　為朝百合（百合科）
　　唐糸草（薔薇科）
花器　飴色釉花瓶

ブルーベリー

〈2頁の花〉　櫻子

ブルーベリーは夏櫨と同じ躑躅科・酢の木属の低木で、原産地は北アメリカ。近年、果樹として日本でも栽培が盛んになってきた。

私も数年前に、ブルーベリー狩りをしたことがある。熟した果実を夢中で集めるのは楽しかったが、上を向いて採るので、帽子をかぶっていても鼻の頭が日焼けして暫く痛かった。

撓わに稔った実はとても健康的で、太陽のようなファッションピンクの薔薇とよく似合っている。トルコで買ったブルーの絵柄の花瓶にもピタリとのった。赤紫色のアンスリウムを加えて、実が熟した色を想像して楽しんでいる。

花材　ブルーベリー（躑躅科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　トルコ花文陶花瓶

ギョリュウ

〈3頁の花〉　仙溪

ギョリュウは中国原産の落葉小高木で、檉柳または御柳と書く。春と秋に桃色の小さな花を枝先に沢山咲かせ、そのあとの実が裂けると白い綿毛で種が風に飛んでいく。乾燥地でも育つそうだ。

漢の武帝の宮殿にも栽培されていたそうで、そう聞くと妖艶な雰囲気にも見えてくる。ギョリュウが雲で、洋種山牛蒡が龍に見えてきた。

花材　ギョリュウ（科）
　　洋種山牛蒡（科）
　　トルコ桔梗（竜胆科）
花器　コスタボダ赤色ガラス花瓶

出逢い花（21）

仙溪

棕櫚竹

エピデンドラム

家の茶室の前庭に棕櫚竹（しゅろちく）が植わっている。竹と名がつくが竹の仲間ではなく、椰子の仲間。中国南部からラオス、タイの原産で、耐寒性が比較的強いので、日本の庭にも植えられたり、室内用の鉢植にされている。

棕櫚竹の仲間に観音竹もあるが、葉の広いものを観音竹、細いものを棕櫚竹と呼んで区別しているようである。

午後の僅かな時間、棕櫚竹のうしろの塀に影が映るときがある。涼しげな葉影が風でキラキラと揺れる。

さて棕櫚竹の傷みの無い葉を一枚。どんな花を合わそうか。日本の夏草ではしっくりこない。やはり南国の花が似合うだろう。でもアンスリウムはよく使うし、ということで見つけたのが小振りのエピデンドラム。花屋の棚で「私はどうですか?」と声をかけてくれたので、大事に連れて帰った。

さてお次は器。以前、南の島で感じた木陰の風の心地よさを思い浮かべて、白い器にしぼる。完成度の高い形よりも、自由さを感じる形。と考えて、この花器を選んだ。胴が少し窪んでいて、点線と実線で輪が描かれ、中心に十文字の絵柄。私には環礁（かんしょう）の中で泳ぐ海亀に見えてきた。

花材　棕櫚竹（椰子科）
　　エピデンドラム（蘭科）
花器　白釉陶扁壺（八木一夫作）

立華時勢粧を読む　⑭

立花秘傳抄　五

砂の物真行草

株立を真の砂の物と名づく。心ふときをよしとす。苔晒木、異曲に、景気すさまじく、七つの枝、意気はづみありて、勢いつよく、株よく見ゆるを、第一とする故、株立とも名づく。生を後より付け、前置をかるく、胴作りを用いざるも、皆これ株をよく見せんがためなり。

同じく軽き心は高く、重き心は低く、請は苔晒木のふときを短く、流枝は長く出して、心と張り合い、控枝は請の勢いを請けて、はづみ面白く、下草しげきは、花形はづまず、さるによって、軽きを賞翫す。株立は下木下草に至るまで一風ある物をえらび、花形するどに見ゆるを専らとす。或師古詩を引いて、

連峰　天を去ること　尺に盈たず
枯松　倒しまに掛って　絶壁に倚る

この句の心をもって、花形趣向すべしと云えり。

〔出典〕李白「蜀道難」

心の高さ三尺ある時は、横のひろさ六尺。或は心の高さに二長半、又は鉢に双倍とも云えり。鉢の大きさ、一尺より一尺五寸までを、小砂の物といい、一間床に用ゆ。一尺五寸より二尺五寸までを、中砂と云いて、二間床に相応す。これより次第に大きなるを大砂と云う。

この「砂の物真行草」の文に添えられている図については、テキスト614号「立花時勢粧・上、砂物真行草の事」ですでに掲載しているので、ここでは「立花時勢粧・中」より三つの砂物図を選んで紹介する。

第六十一図
一株砂物　松真
中野小左衛門
真の砂の物　松　晒木　杜若　薄　夏はぜ　柘植
樫木　檜扇

砂摺（すなずり）の株（水たたきとも云う）と云うは、水より二三分ほど出るように、上を一文字に切り、請の方おもき時は、副の方にすえ、副の方おもき時は、請の方に置いて、一瓶の軽重をはかる物なり。二株砂同前。但し本株に縁をはなれず、うつりおもしろく立てるを習いとす。

前置の水ぎわは、幹を一所によせ、ばらばらにならぬように、株に引き付けて立てるを、能（よ）く寄ると名付けて、古代より専らにする所なり。

立花は遠山の気色、株立は目前の景気にて、枝葉つくろわず、みきけずらず、自然の奇麗を用ゆ。古人云う、松の古葉、梅の枯枝、そのまま見るこそ面白きに、初心の人は、切りとりつくろいなどするは、無下の事なりとぞ。

行の砂の物立てようは、二株にして、一方へは心、正心、見越、副、前置、これを男株という。一方へは請、流枝、正心、前置、これを女株と云う。株二つ立てる時は、正心二つ、前置二つ用うべし。これ二つ真の格式になぞらえたる物なり。然る時は両方の株、軽重なきように立てるを専らとす。

同一方の株苔ならば、一方は晒木を用ゆ。一方直に立たらば、一方は斜になし、一方自然どまりならば、一方は一文字に切るべし。長短高下、圓方曲直と、同意ならざるように取り組むべし。

行の砂の物

第六十七図
二株砂物　伊吹真
中野五郎左衛門
伊吹　晒木　松　苔　杜若　百合
小羊歯　柘植　要　檜扇

前置一方木ならば、一方草を用い、一方あざやかなる物ならば、一方はこまやかなる物、やわらかなる物にはかたき物、白き物には赤き物と、心得て指すべし。正心も又かくのごとし口伝。

草の砂と云うは、株二つなれども、正心ひとつ、前置ひとつなり。これ常の立花の法式、七つ枝の名目にしたがう故なり。女株男株、さのみ軽重にかかわらず、心の方かろき時は、請の方よりあしらい、請の方かろき時は、心の方よりあしらい、花形一面につかねて見る時、釣り合いよく、片落ちなきを、草の砂の物と云う。古来用いるの花形にして、近代板行の図に、あまたしるす所なり。

株立は、異曲風流に、意気はづみを第一と立てるといえど、とりわけ、草にかぎりて、一手珍しき作意なくては叶わざるものか。ある師古詩を引きて云う

江翻(ひるがえ)り石走りて雲気流る
幹は雷雨を排して猶(な)お力争す

〔出典〕杜甫「楠樹為風雨所拔嘆」（楠樹風雨の抜く所と為るの嘆き）

この句の心をよく味わって取り組むべし。一瓶の内に一枝風流なれば、ほかこれにあらそいて働きあり。さればむつかしくあしらいがたき枝にこそ、初心巧者のわかちも知れ、又は珍しき花形も指し出して、人の手本ともなるべきと云えり。

【テキスト618号　内容の訂正】
立花十徳（の10行目）
事(つか)えずして仏縁あり

第三十六図
二株砂物　太蘭真
冨春軒
草の砂の物
太蘭　芍薬　松　晒木　杜若　小菊
著我　嫩

貝塚伊吹

仙溪

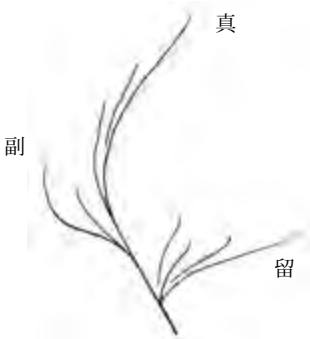
花型　生花　草型　留流し

花器　煤竹竹筒

貝塚伊吹は檜（ひのき）科の常緑樹で、伊吹の変種。伊吹の葉先が針状に尖るのに対して、貝塚伊吹は葉先が丸いので、触っても痛くない。大阪府貝塚市との関係については不明らしいが、貝塚市尊光寺には推定樹齢400年の貝塚伊吹があり、市の天然記念物になっている。

貝塚伊吹は撓めやすいので、生花の基本を身につけるにはもってこいの花材だ。しかし、春の開花時期は避けた方がいい。枝一面に雄花がついている。

作例は留流しの花型で、副と同じくらいの長さに留をつくっている。副の枝先を上げて、長く伸ばした留を際立たせる。



雪柳　二輪菊

仙溪

花型　生花　株分け
主株　草型　副流し
子株　真型
花器　飴色釉水盤

株分けの生花のくだけた雰囲気が好きだ。二種類の花材の組みあわせを考えるのも楽しいし、なにより広い水面が気持ちいい。剣山でいけたあと、小石で隠して水をはると、水際の美しさが際立ってくる。

季節の枝と草花のとり合わせが一般的だが、背の高い草花と低い草花、観葉植物だけの組みあわせ、同じ花の色違いなど、自分で考えて工夫する面白さがある。

花型はどちらか片方に動きをつくるようにして、もう片方でその動きを受け止める。静と動の対比が見所となる。

たとえ教わっていない組みあわせでもいい。オリジナルの株分け生花をいけてみてほしい。いい感じにいけられたら写真に撮っておこう。見せて頂けるのを楽しみにしています。

縞薄　女郎花　桔梗

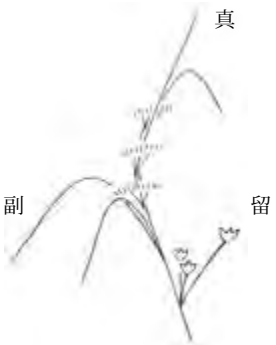
仙溪

花型　生花　三種挿し

花器　小判型陶水盤（伊藤典哲作）

涼を感じる生花の作例。縞薄（しますすき）は薄の中では比較的ながもちする。水盤に足元をそろえて立てるだけで、清々しい空間が生まれる。

薄の葉は左右に広がるので、前後に葉がくるように茎を大きく撓めて真とし、副や胴には片側だけの葉にしたものを挿している。ただ、実際にはなかなか難しい。納得のいく姿になるように、葉さばきの加減をその都度工夫する。葉を整理しすぎるとギスギスするし、残しすぎると生花にならない。ちなみに作例では3本の縞薄を使っている。



桑原専慶流いけばなテキスト626号　2015年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

花摘み

櫻子

少しでも涼を感じるようにと、白竹の平籠にいけてみた。タニワタリノキとミヤマナルコユリで緑の繁みをつくって、その間から小さな花たちを覗かせる。籠に野菜を盛るような感覚でいけてみた。こんな野の花を集めたようないけばなも好きなのだ。

最近、庭木や花の手入れをするようになった。米の磨ぎ汁も活用している。庭の草花が元気に伸びると、玄関の掛け花などにいけたりできるので嬉しい。

野の花を摘む楽しさは、太古からの遺伝子に書き込まれているのではないかと思う。摘み草料理が人気があるのも頷ける。自然の中で宝探しをしているような感覚。それによって心と体がよろこぶ感覚を、私達はきっと生まれた時から持っているのだ。

作例のタニワタリノキも、数年前に岡山の先生が庭から切っていけておられたので初めて知った花だ。不思議な白い球形の花だが、もとは南国の谷間や湿地の植物とのこと。今回は花屋に売られていた。他の花も、花屋さんで目に付いた花たち。これも私の花摘み。

花材　姫百合（百合科）
　　姫金魚草（胡麻の葉草科）
　　谷渡の木（茜科）
　　深山鳴子百合（百合科）
　　赤花歌仙草（菊科）
花器　楕円形平籠（公長齋小菅）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
9月号
No.627

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

竹と月と人といけばな

岡山の夏の研修会では、かぐや姫の物語をイメージして舞台に花をいけた。（8～9頁に関連記事）

「竹取物語」は日本最古の物語と云われているが、かぐや姫が竹から生まれたことと、最後に月へ帰るという奇想天外なストーリーからは、「自然回帰」というテーマを感じる。

富や権力からの誘いをかたくなに断りつづけるかぐや姫……。そういえば、中国にそんな話があった。紀元頃の厳光（厳子陵）の逸話だ。後漢の皇帝となった旧友光武帝からの手厚い誘いを一蹴し、富春山で自然に囲まれた無欲恬淡の暮らしを貫いた。

厳光のように、山里で畑を耕し、富春江に釣り糸を垂れる、そういう自然な営みこそ尊いこととわかっていても、人は私利私欲を捨て去れないがゆえに、現実は混沌としていくものだ。そんなメッセージがこめられているのかも。

ともあれ、竹と月を印象的に扱っている点で、竹取物語は鮮やかに際立っている。竹と月に象徴された「自然」と、人の営みとを対峙させる。そんな着想があったのではないだろうか。

私達は竹や月と人との関わりをどれだけ知っているだろう。竹細工は化学製品に替わり、月の暦を使わなくなって久しい。人と自然の繋がりを感じとるアンテナを無くしてしまいそうだ。そんなアンテナを育てることも、いけばなの役割だと思う。

紅満作と白い蘭

＜表紙の花＞　櫻子

徳島県内の洋蘭園でつくられた新品種。東洋的な風情を感じたので、季節の枝と合わせてみた。花器の銀彩と白い蘭、金彩と葉の色づきがそれぞれ調和してくれた。

花材　丸葉の木・紅満作（満作科）
　　蘭「ホワイト・フェアリー」（蘭科）
　　鶏頭（莧科）
花器　黒地金銀彩陶花器

七竈と藤袴

＜2頁の花＞　仙溪

自然の色彩のなんと美しいことか。紅葉花材を手にするよろこびは、この季節ならではのものだ。黄、橙、赤が重なり合い、広がって行く。色の切れ間に、藤袴を香らせた。

花材　七竈（薔薇科）
　　藤袴（菊科）
花器　紺色釉陶花瓶

柴栗と鉄砲百合

＜3頁の花＞　櫻子

「美白」という鉄砲百合は蕾が雪のように白く、不思議な存在感がある。栗の枝を広げ、野の花と挿すと、草木を照らす月光のように見えてきた。

花材　柴栗（山毛欅科）
　　鉄砲百合「美白」（百合科）
　　金水引（薔薇科）
　　ポリゴナムの赤花（蓼科）
花器　青色釉陶花瓶

七竈（ななかまど）の立花

〈4頁の花〉　仙溪

花型　立花　除真（行形）
七竈（真・副・見越・請・流枝・胴）
百合（正心）
木苺（胴・前置）
晒木（控枝）
桔梗二色（あしらい）
花器　天女模様銅花器

山では青々と茂る木の一部が紅葉していることがある。そんな情景を思い描いて立てた。百合の臙脂色が全体を引き締めている。

刈萱（かるかや）　紫鴨上戸（むらさきひょどりじょうご）

〈5頁の花〉　仙溪

花型　生花　株分け
主株　行型　刈萱（稲科）
子株　草型　紫鴨上戸（茄子（なす）科）
花器　脚付角水盤（伊藤典哲作）

珍しく鴨上戸の花と実が切り花で売られていた。丈夫な姿だったので、そのまま剣山にさしている。鴨上戸は白花だが、これは薄紫色をしていた。まだ実は青い。以前山道で見つけたことがあるが、山の冷たい空気の中で赤く色づいた丸い実は、宝石のように美しかった。

黄色くなりかけた刈萱は、ざっくりと生花のバランスにおさめ、子株の長く下がった副に対して、主株の真には厚みをつけている。

立花秘傳抄　五

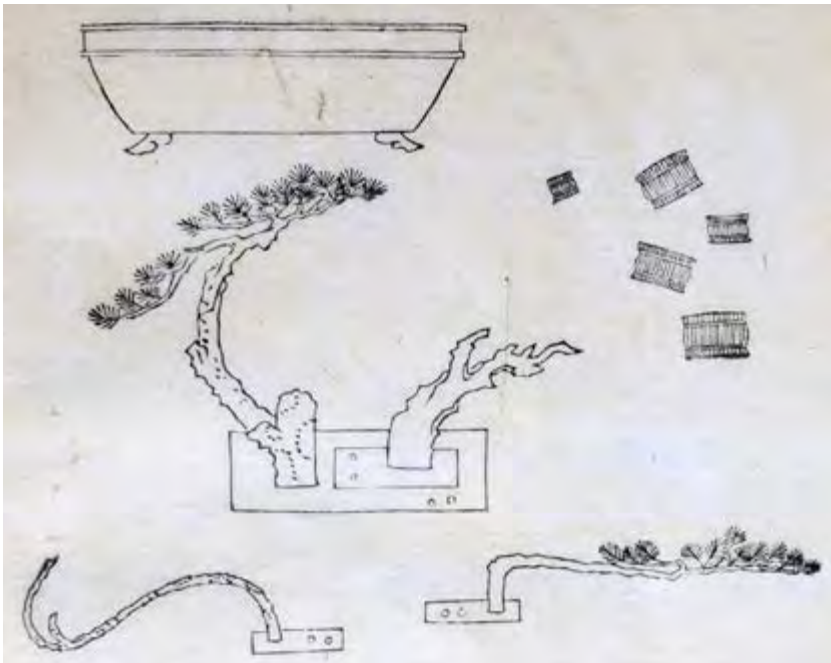
地取の事

一株の地取は左右かたよりなく、前を広く後をせまく取るべし。一株の鉢あまりというは花形の図にこれあり。

二株は鉢の足の外つらを定法にして、株を立つべきと云えり。然れども鉢に替わりある時は、一応にさだめがたし。

鉢の横ぶちより、株までの間、両方三寸あける時は、中のあき六寸あけてよし。株大小ありて、中のあき片せば有時は、水ぎわのあしらいにて、等分に立てなおすべし。かならず両方のあき不同なきように立てるをよしとす。

床正面あかりならば、流枝の方を少し奥へ入れて株を立つべし。口伝。



床横あかりならば、いづれにても明かりの方の株を奥へ入れて立つべし。口伝。

古代の地取は、下子板一枚、両株共に、上よりかすがいにて打ち付けるにより、地取自由ならず。このごろは鉢の底の広さ二尺ある時は、下子板一尺七八寸などに切り、男株を立てんとおもう所に墨打をして株をすえ、板のうらより釘を二所ばかり打ち付くるなり。女株はまた別

の板の小さきに右の如く打ちつけ、男株の板の上へ女株の板を重ね、自由自在にゆづり合い、地取り片よりなきように取り組み、さて上の板より下の板へ釘を二所ばかり打つなり。流枝、控枝も同所なり。また株へそのまま打ちつけてもよし。

およそ込（こみ）の高さは鉢の口より、六分ほど下にて、並ぶべし。砂の厚さ三分、水の深さ三分ばかり。さりながら水の深きは涼しげなし。

込は鉢中に高低（たかびく）なく、一面に押し合わせ、すこしもすきまなく、さて砂を入れ水を入れて、下木下草をさすべきなり。

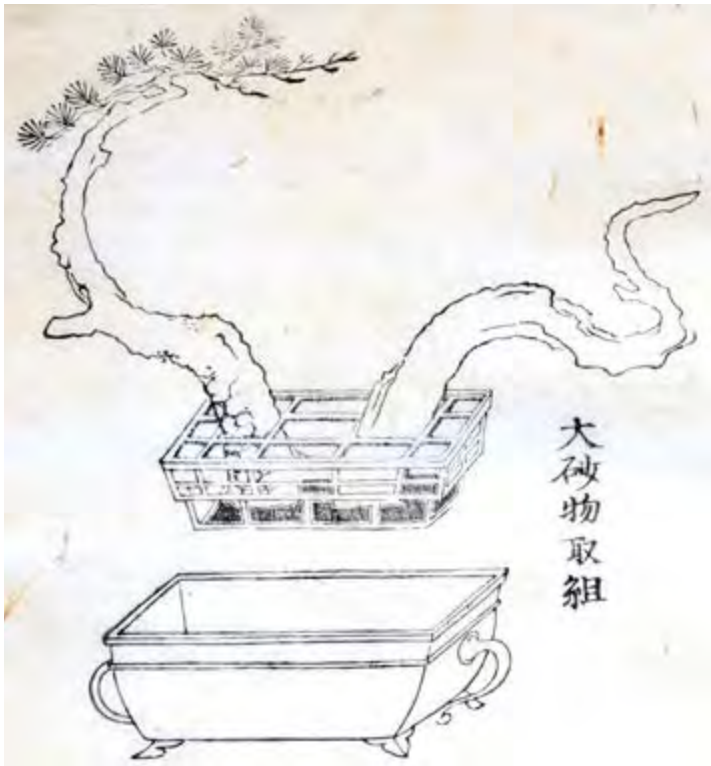
株の前後、草木しげくさす所は、大きなる込の堅からず柔らかならざるを、株へ引き付けておくべし。又砂の物に盆石を立てまぜる事。古来よりの法度（はっと）なり。

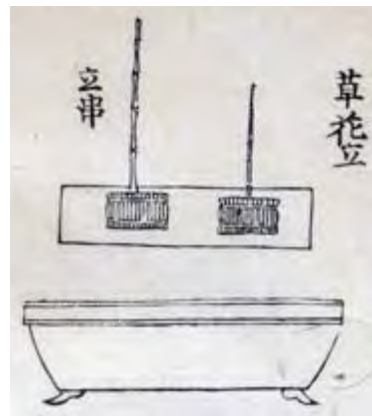
草花の砂の物は、地取りを能くして、込を大きに結び、その真ん中に立串を強く立て、重き草は串に結びつけ、軽き草は込に指すなり。

違棚の下の砂の物は棚のくみようにしたがい、心の梢を棚下の間あきの方へ入れ、棚板の角へ枝葉さわらざるようによけて指すべし。上下左右前後物にあたらず、ゆるやかなるをよしとす。

大砂の物、三間四間は、松、檜、柏樹、梅、水木などの大木を用ゆといえど、五間七間に至りては松の一色ならでは成しがたし。取り組みよう図のごとし。小道具は心、請の幹へ打ちつける。砂は板を敷いてその上に蒔（ま）くなり。

（法度：禁じられていること）





花フォーラム（in倉敷）

竹取物語

櫻子

今日は皆さんをいけばなで竹取物語の世界へお連れしたいと思います。

「竹取物語」は文章というよりも、絵としておぼえていらっしゃる方が多いのではないでしょうか？

最初の竹林の中で翁がパァーと光る竹を見つける場面。

クライマックスの、月の世界の御使いが降りてきて、かぐや姫がのぼっていく場面。絢爛豪華。にしき絵のような。印象に残りますよね。

子供のころ絵本で読んで、その美しい場面にほれぼれしたという方も多いのではないでしょうか。

今舞台では竹の大きな提灯にグロリオーサのあかりが灯っていきます。百合の仲間の花ですが、まるでかがり火のように舞台を照らしてくれます。

そして竹林には夏の美しいもみじが生けられていきます。

緑の濃淡、波打つ竹林の美しさ。風を感じるように。竹林に翁が入って行く様子を皆さんにも感じていただきたく思います。

桑原専慶流にも竹の翁のような方が居て、綺麗なこの竹を切ってきてくださいました。竹をいつも大切に扱っておられるので、こんな提灯の形や窓の開いた竹を作る事が出来られるのだと思います。いつも本当にありがとうございます。

「竹取物語」は、仮名文字で書かれた日本最古の物語といわれます。

成立は9世紀終わりから10世紀はじめとされますが、正確な成立年も作者も、わかっていません。

ただし漢文や和歌や仏教の知識がないと書けない文章ですから、作者はかなり身分の高い教養人であろうと思われます。

また、かぐや姫が帝の求婚をはねのけてしまうなど反体制的な内容が強いですから、当時権力を握っていた藤原氏方の人間ではなく、たとえば僧侶などではなかったかと推測されています。

「竹取物語」のお話は大きく三部に分かれます。

第一部では、翁が山奥でかぐや姫を見つけ、育てる。3か月で大きくなって、きれいな娘さんになるところまで。

第二部は、貴族たちの求婚です。なんと美しい、私と結婚してください。迫る5人の貴族に、かぐや姫は無理難題を押し付けます。

無理難題を押し付けられた貴族たち、ある者はニセモノを作らせ、ある者は金にまかせて中国の商人から取り寄せ、ある者は途中で懲りてほっぽり出し…

いずれもうまくいかず、結婚はできません。

第三部では、いよいよかぐや姫のうわさが帝の耳に届きます。

そんなに美しい娘がいるのか。ぜひ妻に迎えたいといってくる。しかし、かぐや姫は帝の求婚も拒否。

最後は御使いが迎えに来て、かぐや姫は昇天し、月の世界に帰って行くという、おなじみの筋書きです。

今舞台の中央では翁が白く輝く竹を見つけた時の情景をシマアシとダンチクで印象的に表現しています。

翁は野や山に出かけては竹を取ってきて色んな道具を作っていました。

笠、竿、笊、籠、筆、箱、筒、箸、筍は料理のために。その他簾、篩、簪、皆さん、お気づきでしょうか、これらの漢字は全て竹かんむりの字です。今日演奏して下さっている箏も竹かんむりがついています。竹と縁が深いのです。

それ程竹を熟知して大切にしてこられた翁だからこそ、かぐや姫に出逢えたのだと思います。

「源氏物語」には「竹取物語」の影響が強くうかがえます。

源氏物語は平安時代半ばに書かれた物語です。

「源氏物語」17帖「絵合」の章では、竹取物語について語られています。

どんな風に語られているのでしょか？そしてどんな場面でしょうか？

絵合わせとは、宮中のお遊びとして左右のチームに分かれて、互いに絵を見せあいます。平安時代に貴族の間でおこなわれました。そして優劣を競うわけです。

冷泉帝は絵を好み梅壺の女御の絵を愛好しました。梅壺の女御とは、光源氏の養女で冷泉帝の寵愛を受けておられますが、先に女御としておられた権中納言の娘の弘徽殿の女御もライバルです。帝の寵愛は、どちらも甲乙つけ難いのです。

親である光源氏と権中納言の見守る中、両陣営による帝の前での絵合わせが行われました。

その場面に「竹取物語」の絵巻物が出てきます。

「物語の出で来はじめの祖なる『竹取の翁』」と紹介されます。

唐錦の縁がつけられてあって、赤紫の表紙、紫檀の軸で上品な絵巻物です。

絵巻物を鑑賞しながら互いが批評しあいます。ちょっと意地悪な感じです。お聞きください。

「竹取の老人と同じように古くなった小説ではあっても、思いあがった主人公の赫耶姫の性格に人間の理想の最高のものが暗示されていてよいのです。卑近（俗っぽい事）なことばかりがおもしろい人にはわからないでしょうが」

とある方が言われますと、別の方が、「赫耶姫ののぼった天の世界というものは空想で作られたものです。この世の生活の写してあるところはあまりに庶民的すぎて美しいものではありません。貴族は多く出てくるのに宮廷の描写などはすこしもないではありませんか。赫耶姫は竹取の翁の一つの家を照すだけの光しかなかったようですね。貴族の若者が大金で買った毛皮がめらめらと焼けたと書いてあったり、にせ物をもって来てごまかそうとしたりと不愉快な事ばかりです。」

こんな事を言い合いながらいつまでも中々勝負が決まりません。

結局最後は光源氏の出した絵に誰もが息を飲みました。須磨の風景が描かれたその絵には、源氏が過ごした侘び住まいや海の様子が余す所なく表され、趣深い歌まで添えられていた。

それまでに出された絵のことは全て忘れ去り、人々は、この絵に心を奪われてしまいます。

絵合わせは、光源氏の勝利となり、敗れた権中納言は、娘に対する帝の寵愛が損なわれるのではないかと危惧するのでありました。

千年以上前に書かれた長編小説の源氏物語にもこのような形で現れています。

こんな風に竹取物語はその後の日本文学にも大きな影響を与えています。

皆さんにもかぐや姫が見えてこられましたか？…輝く光のようなものが見えてこられましたでしょうか

岡山県本部主催　花フォーラム

花 HANA 音 OTO　コラボレーション

会期：7月12日(日)　会場：ライフパーク倉敷
花：桑原仙溪・桑原櫻子　箏曲：山路みほ
入場者：260名　公開いけばな教室：20名

オクラとパニカム

〈10頁の花〉　櫻子

オクラはアフリカ原産の多年草だが、寒さに弱いため日本では一年草として栽培される。ちなみにオクラは英名。パニカムは黍属につけられた名前で、アメリカ原産のいくつかの品種が切り花になっている。脇役としてとり合わせに加えると、季節の風情が深まる感じがする。

赤いオクラをパニカムの中に立てると、優しい表情になってくれた。

花材　オクラ（葵科）
　　パニカム（稲科）
　　薔薇「カルピデューム」
　　（薔薇科）
花器　トルコブルー手付陶花器

蔓梅擬と鶏頭

〈11頁の花〉　仙溪

器の装飾はシンプルなものを好んで使っている。例えば白黒とか。そして模様があるとするなら、自然をモチーフにしつつ、抽象的なデザインの方が花をいけやすい。

雨上がりの庭。蜘蛛の糸に水滴がいっぱいついていることがある。作例の花器のデザインはまさにそんな感じだ。自然の輝きを感じる器は、いけばなの趣を深めてくれる。

花材　蔓梅擬（錦木科）
　　鶏頭二色（莧科）
　　女郎花（女郎花科）
花器　白黒陶花瓶（近藤豊作）

桑原専慶流いけばなテキスト627号　2015年9月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

月の暦と太陽の暦

今年の中秋の名月は9月27日だそうだ。ちなみに来年は9月15日、再来年は10月4日と年によって違う。旧暦の8月15日が新暦のいつに当たるかということ。

現在の太陽暦に代わる前の太陰太陽暦（太陰＝月）では、月が見えなくなる新月から各月がはじまっていた。なるほど毎月の3日頃には、まさに三日月がでていたことになる。とても分かりやすい。満月は15日頃。

旧暦では7、8、9月が秋なので、中秋すなわち8月の満月を中秋の名月と呼ぶ。8月15日の月を十五夜、9月13日の月を十三夜と呼んで、どちらも月見をして月に供え物をしていた。十五夜は芋名月、十三夜は栗名月、豆名月とも呼ばれる。

一方で、太陽黄経の角度を元にした二十四節気もあって、秋分の日はその一つ。旧暦では毎年日が変わり、新暦では毎年ほぼ同じ日になっている。

さて旧暦と新暦を比べると、旧暦のほうが自然に添った暮らしができそうな気がするがどうだろう。作物の収穫も月の満ち欠けにあわせていたと聞く。そのあたりのことを一度調べて書いてみたい。

出逢い花（22）

仙溪

山芍薬の実（牡丹科）
唐松草（金鳳花科）

どちらも山の宝ともいうべき植物。強烈な印象の山芍薬の実に、粉雪のような繊細さを感じる唐松草。谷川の水流のような造形の花器に挿すと、奥山へ通じる秘密の扉が開いて、向こうから微風が吹いてきた。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
10月号
No.628

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

菊　萩（はぎ）

〈2頁の花〉　仙溪

花型　生花　株分け
花材　主株　菊（菊科）
　　子株　萩（豆科）
花器　粉引（こびき）陶花器（伊藤典哲作）

家庭画報10月号に、櫻子が二色の豆を使った豆ご飯を紹介しているが、それには「萩ご飯」の名前がつけられている。緑と赤の豆色を、萩の葉と花になぞらえての命名だが、心躍る楽しい名付け方だと思う。

萩は古来より日本人に愛されてきた。万葉集に一番多く詠まれているし、美術・工芸にも好んで描かれている。

菊の生花は撓める技術が難しく、敬遠される人が多いが、一株にこだわらないで、あっさりとした株分けにして、とり合わせる花との季節の色彩を楽しむ気持でいけてみてはどうだろう。

作例では同色異種の花で上品にまとめたが、萩に対して菊がやや重く見える。小菊や嵯峨菊のほうがバランスが良かったかもしれない。

出逢い花（23）

＜3頁の花＞　仙溪

糸芭蕉（いとばしょう）の枯葉（芭蕉科）

アスコセンダ（蘭科）

植物が枯れた姿も味わい深い。たまたま花屋で、いい感じに枯れた糸芭蕉の葉を見つけたので、深紅の蘭と出逢い花にしてみた。

この赤い蘭の名前はアスコセンダ。洋蘭に詳しい方はご存知と思うが、私ははじめて名前を知った。アスコセンダという蘭は、バンダとアスコセントラムの交配で生まれた蘭で、多くの品種があるらしい。小型のバンダというところだが、花数が多いので、東南アジアでは大変人気があり、庭の木にぶら下げて育てているそうだ。

枯れた花材にはみずみずしさを加えるように相手を選ぶといい。そうすることでお互いの存在感が際立つ。

さて、器をどうしたものか。南国を連想させてくれるような、それでいて枯葉のフォルムと響き合うような器はないものか。と、ぶつぶつ云いながら探す。漸（ようや）く一つ引っ張り出してきた。

籠花

＜表紙の花＞　櫻子

秋の草花が出揃う頃になると籠に花をいけたくなる。

掛花も投げ入れも籠に代わり、又果物や南瓜、さつま芋も暫く籠盛りにして眺めている。

この竹籠は昔から家にあるものだが、唐人笠籠花入（とうじんかさかごはないれ）という籠に似ている。韓国の人がかぶる帽子を逆にしたような形から唐人笠と呼ばれる。

この籠には蔓（つる）の手が付いているので固苦しくなくどんな花でも気軽に飾っている。前方にやや傾いているような形で口元にもたっぷりの葉を添えられる。

秋明菊（しゅうめいぎく）と鳥兜（とりかぶと）、どちらも綺麗に咲く時季の短い季節の花だ。紅葉し始めた楓を添えた。

花材　秋明菊（金鳳花科）
　　鳥兜（金鳳花科）
　　楓（楓科）
花器　手付唐人笠籠

◆横から見た、いけばなの奥行き。

基本花型にいける

主材　檜扇の実（菖蒲科）
副材　薔薇（薔薇科）
　　ピンクッション（ヤマモガシ科）
花器　陶コンポート

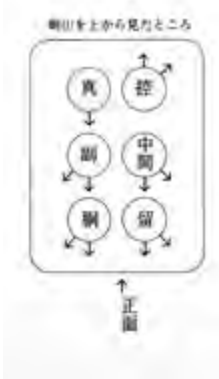
盛花の基本花型には立体と斜体があり、主材の姿が立ち上る場合は立体型に、横へひろがる場合は斜体型にいける。

主材に選んだ檜扇の実は立体・斜体どちらにもいけられる花材だが、一本しかない場合は立体型がいいだろう。

立体副主型

◎剣山の主要部分の説明

それぞれの役枝を剣山に挿す場合、位置と方向は、およそ左の図のようになる。



① 主材の檜扇の実を、いけあがりを想像して、副の位置に立てる。立ち姿に見える向きを探して、やや前傾させている。

② すぐ後ろに薔薇を立てる。真の位置。

③ 副の足元から前方へ出るように、胴の薔薇を出す。写真では短く見えるが、実際には真の薔薇よりも長い。

④ 留の位置に薔薇を入れて水際をととのえ、その後ろの中間にピンクッションを覗かせたところ。さらに中間にピンクッション、控に檜扇の実を見せて、奥行きをつくる。（4頁の花）

横から見たところ。

それぞれの長さ。主材の長さは、花器の幅と高さを足した長さの1.5～2倍を目安にして、水の中の深さを加えて切る。

立華時勢粧を読む　⑯

立花秘傳抄　五

立花名目　並びに　訓解

心の事

一瓶の内、高く直なるを心と名付けることは儒家の中心、仏者の花心と云うより出たり。さるによって極真立には心直にかたよらざるを本意とす。それより相生心、合心、二つ真、直心、除心、右五ケの心を定めて、この外心の名目なし。

心は君のごとく。六の枝は臣のごとし。心は位有りて、幽玄なるを用うべし。六の枝は勢いつよく、働きあるを専らとす。これ君臣合体の意なり。

古人の云く。心はことたらぬ様なるをよしとす。たとえば上の句、鶯の聲なかりせば雪きえぬ、下の句、山さといかに春をしらまし、と読むるが如く、下句にて上の句をよくことはり、

（心＝真）

一首のすがたよろしきように、立花も意得て指すべきと云えり。又云う、たとえば猿楽の能をするに、笛、鼓、太鼓をもって、太夫一人をおもしろう見するように、はやすといえど、つつみは鼓、笛はふえ、一ぶん一ぶんの面白所をなすがごとく、立花六の枝も、よく心を生立て、おのれおのれが働きあるべし。

心のみきふとく、葉あつきは賤し。枝左右へ長きは、請副はたらかず、苔、晒木の重きは低く立て、梅、柳のかるきは高く、枝なき心は瓶にのらでも苦しからず。除高きは、胴長くて古流なり。遠くより見る心は、葉の茂りたるを用うべし。

梅は冬の内は心に立てず。柳は初冬より立て初る。一本立ても苦しからずといえど、河柳をあしらう。河柳の心はかならず水際へぬくべし。藤の心は、松のみき狂い、老いたる風情よし。南天には風をもたせ、薄は陰陽の葉を見せ、緑松には古葉をのこし、竹の心は葉先床の角へなびかせ、水際にて節を見する。ほか之を略す。口伝。

直心は成る程真直なるをよしとす。除心は梢正心の上へもどして立てる。常の事なり。行草の花形に至りては、梢瓶にのらでも苦しからず。或いはみき異曲に、すわりがたき心ならば、まず瓶に立て置き、さて立ちのきて真横から見るに、梢正心のとおりにあたらば、必ずすわるべし。

方丈、客殿、書院、仏前の広き所にては、まず心を立て置き、二三間後へよりて、心のすわりを見るべし。近く居て立ると、遠くより見るとは、ちがいあるものなり。さて大枝を取り組みて、又前のごとく、立ちのきて見るべし。

同志社大学文学部・社会学部 父母会講演

会期　7月18日㈯
会場　同志社大学良心館
講演　「心の花」桑原仙溪
講演内容の一部を紹介します。

いけばなの大切な要素を3つあげてみましょう。「自然の息吹を敬う心」「花色に心を遊ばせて」「新たな出合いを楽しむ」。自然を敬い、その命をいかすための型の習得。心の中に刻みこまれた色を、花色で表現する。舞台の演出家や指揮者のように、新たな出合いで花のドラマを生みだす。花と器、花と人、人と人との出逢いをつくる。そんな多様な奥深さをもっているのがいけばななのです。

私はずっと心の花とは何かを問い続けています。2011年5月に安中の教会で献花させていただいた時や、ドイツで花をいけた時に感じたもの、感じてもらったものが、心の花ではないかなと感じています。私は幸い、花を通じて心を伝えられるいい仕事に就いています。そのことに感謝し、たくさんの人たちと花を通じた心のつながりができますことを願っています。

花展のいけばなについて

5月下旬に広島で開催された日本いけばな芸術中国展には、当流から18作のいけばなが出品され、どの出品作も気迫のこもった良い花だった。岡山の先生方の熱意に感謝している。

いけばな展は晴れの舞台。大きな花展となると尚更(なおさら)だ。立花大作には締まった松葉を使っていたが、自分で松を育てておられるそうだ。

今回、花材の運搬にも気を遣われた。トラック輸送だと花がいたむので、大型バスをチャーターして、出品者と共に花材を積んで会場へ運ぶ念の入れようだ。

いけた後の花の世話も大切。会場からすぐのホテルに泊まり込み、朝夕の手直しを欠かさない。その際の予備花材も充分に用意されていた。

先のテキストで白黒写真を掲載したが、もう一度カラー写真で現代花について振り返ってみたい。

花展に立花や生花という古典花ではなく、現代花を出品する場合、およそ次のような方向性があると思う。

㈠山里水の自然をいける

写真①～③。

季節の和(わ)の花材で、自然の風情や景色を表現するいけばな。

㈡特殊な花材をいかす

写真④～⑥。

普段いけることのないような特別な花材や、とっておきの枯れ物などを使って、それをいかすとり合わせと花形を工夫する。

㈢色彩を重視した自由な発想

写真⑦～⑫。

特殊な花材でなくても、そのものの色彩を際立たせるとり合わせやいけ方を考える。おもいきって数多くいけたり、同系色の濃淡を集めたり、反対色をアクセントにしたり。

以上の他にも熱帯など他国の自然を表現したり、自由ないけ方があっていいが、およそこの三つのうちのどれでいくかを最初に選んで、あとは、出したい雰囲気、色彩、使いたい花材、使いたい花器、やってみたいいけ方などを考えていく。

とり合わせる花材が多すぎると、かえって主張のない花になるので注意したい。要は表現の的(まと)を絞ること。

そして会場にいけたところを想像してみる。敷物で色を加えたり、敷板が必要かどうかも考える。

◆山里水の自然をいける

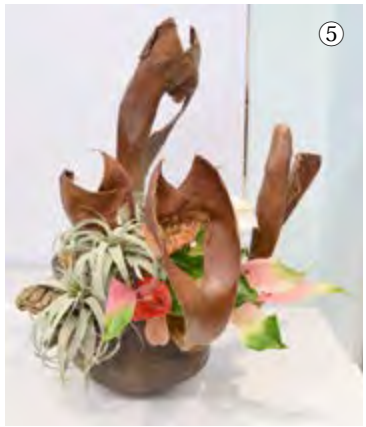
①

②

①

◆特殊な花材をいかす

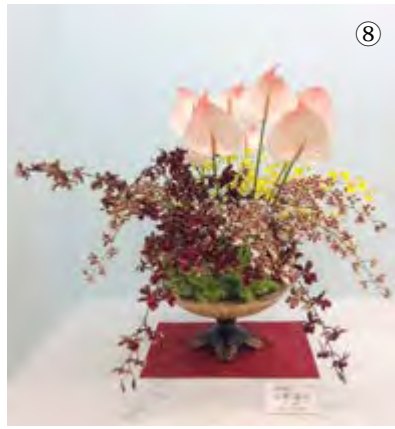
④


⑤

⑥

◆色彩を重視した自由な発想のいけばな

⑦


⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

コスモス

櫻子

今では日本の秋を彩る花の一つになったコスモス。でも、元を辿るとメキシコの植物だ。メキシコ原産の花にはほかにもダリア、ポインセチアなどが馴染み深い。

メキシコというと熱くて乾燥したイメージを持つが、首都メキシコシティーの標高は二千メートル以上あり、昼と夜の温度差が大きい。コスモスは雨季から乾季へ変わる9月から10月に咲く野の花だ。

マリアッチのギター演奏のように、情熱的にコスモスをいけてみるのもいいかもしれないが、今回は日本の里の風景に溶け込んだ花としていけてみた。ただし和花と上下に分けて、印象的に見えるようにした。

花材　コスモス（菊科）
　　雪柳（薔薇科）
　　桔梗（桔梗科）
　　ピンポン菊（菊科）
花器　条文陶花瓶

◆横から見た、いけばなの奥行き。

ネリネ　アナベル　櫻子

アナベルは北アメリカ原産のアメリカノリノキの園芸種。白い装飾花が半球状に咲いたあと、作例のように緑色に変わって枝に残る。ちなみにカシワバアジサイも同じ北アメリカ原産。また、花序の大きなピラミッドアジサイ（ミナヅキ）は東アジア原産のノリウツギの園芸種だ。

ネリネは南アフリカ原産の球根植物で、日本や中国に分布する彼岸花やリコリスと同じヒガンバナ科だが、属は異なる。

私達は現在、昔よりも多くの花をあたりまえのようにいけられるようになったけれど、それらの原種の生態や、栽培のご苦労を知っておきたいと思う。それが一つ一つの花への愛着につながる。

ネリネの茎も生かすようにシンプルな構成にしてみた。

花材　ネリネ（彼岸花科）
　　アナベル（紫陽花（あじさい）科）
花器　角柱陶花瓶（宮下善爾作）

◆横から見た、いけばなの奥行き。

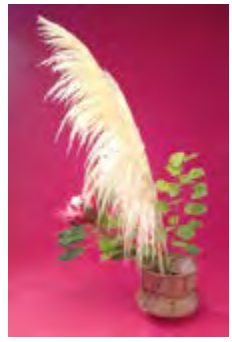
桑原専慶流いけばなテキスト628号　2015年10月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

パンパスとプロテア　仙溪

南米のパンパスと南アフリカのプロテアを出逢わせた。どちらも未知の大地に根を下ろす、野生の強さを感じる。

インカのような模様が刻まれた花器にいけると、太古の地球の鼓動が聞こえてきそうだ。

花材　パンパス・グラス（稲科）
キング・プロテア（ヤマモガシ科）
煙の木の葉（漆科）
花器　飴色釉花器



◆横から見た、いけばなの奥行き。

レモンだより

「人間って花を切ったり挿したり、不思議な生き物だにゃ～」

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
11月号
No.629

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

ぶらさがる

＜2頁の花＞　櫻子

春には美しい花の房を下げていた藤も、秋になると剽軽（ひょうきん）な長細い実が蔓にぶらさがっている。藤棚であれば、さしずめ自然のシャンデリア、ではないにしても、見ていて楽しい気分になる。

とは云え、これだけ沢山ぶらさがった枝をいけるのは容易ではない。重量バランスを考えつつも、花は前方へ出すことで、藤の実のボリュームに負けない奥行きをつくる。

取り合わせには4色のピンポン菊を選び、藤色の杜鵑（ほととぎす）をたした。藤の実にカラフルなピンポン菊がよく似合っている。

花材　藤の実（豆科）
　　ピンポン菊4色（菊科）
　　杜鵑（ほととぎす）（百合科）
花器　市松模様陶花瓶

◆横から見た、いけばなの奥行き。

しなりの美

＜3頁の花＞　櫻子

頭を垂れる稲穂を見ると、自然の恵みに感謝の気持ちが湧いてきて、心の中でこちらも頭を下げている。

今年も新米の季節がやってきた。

この時期、花屋にも少量の黒米が売られる。赤米や黒米は古代米と名付けられてから栽培が増えてきたそうだ。いけばなでも独特の存在感が出せる花材だと思う。

私達の命の糧、その元の姿を愛でることもまた、心の糧となって、より深く自然との関わりを感じることができる。

相手には、同じくしなる姿の上臈杜鵑に、大輪のピンクの菊を選んだ。

垢抜けた華やかさと可愛さを兼ね備えた菊は、恵みへの感謝の気持ち。

花材　上臈杜鵑（百合科）
　　黒米（稲科）
　　菊「飛騨マム」（菊科）
花器　籠花入（桑原健一郎作）

◆横から見た、いけばなの奥行き。

赤芽柳

＜表紙の花＞　仙溪

花型　生花　草型　留流し
花器　耳付銅花瓶

赤芽柳は別名をフリソデヤナギ（振袖柳）とも呼ばれ、花芽が大きくなって、赤い芽鱗片が落ちたあとの花穂はいかにも春らしい。

しかし、生花にいけるなら、まだ花芽が小さくて固い初冬がいい。

日の当たる側、いわゆる日表は、枝肌も花芽も赤みが強いので、日表の側が手前になるようにいける。

本数多くいけるなら、銅器がよく似合う。

基本花型にいける

主材　紫式部（紫蘇科）
　　※熊葛科から移動
副材　竜胆（竜胆科）
　　木苺（薔薇科）
花器　陶水盤

紫式部には枝が直立するものと横へ伸びるものがあるので、その性質にあわせて花型を考える。作例の枝は横へしなるような枝振りだったので、斜体型を選んだ。

一本の枝からに十本以上の長い小枝が出ていて、そのままでは大きすぎるため、小枝を切り離していけている。

紫式部の実には茂った葉を合わせたい。秋色に色付きはじめた木苺（構苺）はよく映る。白色と青紫色のしぼりの竜胆で、彩りを深めた。

◎剣山の主要部分の説明

それぞれの役枝を剣山に挿す場合、位置と方向は、およそ左の図のようになる。

斜体副主型

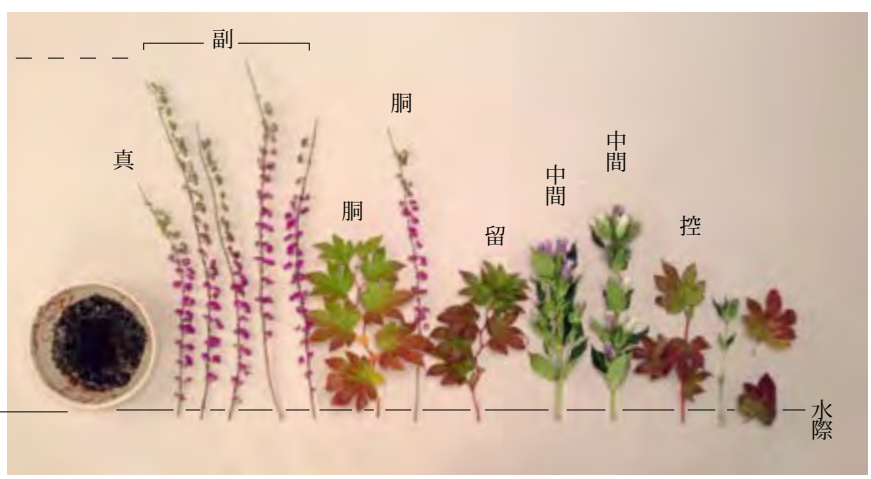
横から見たところ。

① 主材の紫式部の実を、いけあがりを想像して、副の位置に５本ほどさす。先まで実がない枝は適当に途中で切り縮めているが、自然な切り方を工夫する。

③ 中間の位置に竜胆を低めにさす。やや前傾させている。

② 真の位置にも紫式部の実を一本立てて奥行きをつける。胴の位置に木苺を出す。副の伸びを引き立てつつ、水際を整える。同じく胴に紫式部の実も一本加えて、奥行きをつくる。

④ 留の位置に木苺を加えたところ。
中間にもう一本竜胆を立て、竜胆の脇枝と木苺の下枝を控の位置に加える。（４頁の花）



それぞれの長さ。主材の長さは、花器の幅と高さを足した長さの1.5～2倍を目安にして、水の中の深さを加えて切る。

花器の幅と高さの2.2倍

花材の量感によって、バランスの良い長さを考える。
花材が細い場合は少し長めにする。

立華時勢粧を読む　⑰

立花秘傳抄　五

立花名目　並びに　訓解（つづき）

正心の事

直心立の時は、心の前に立つるにより、心かくしと名付く。除心の時は直なるもの一瓶のうちこれより外にあらざるにより、正心と名付く。また小心とかく時は直心の大にかわりてすなおなるを立つる心なり。

正心の高さは、松じん四尺ある時は、禿松二尺に立つべし。これ定法なり。梅、柳などの細き物ならば、高く指すべし。また心に梅、柳などを立つる時は、右の格を以て、正心よろしく立つべきなり。

除心の正心は心の前より立つる流もあり。また後ろより立つる流もあり。前より立つる時は、花形丸く、後ろより立つる時は、花形ひらめなり。されば花形にしたがい、時によろしく立つべきなり。

心少し除たらば正心ほそきものを用ゆべし。広くのきたらば、大輪なるものを用ゆべし。心の幹ふときには柔らかなるもの、草の心には草を用い、水仙、杜若は花より葉を高く、紫苑、萱草は下に葉をあしらう。南天、わくら、かなめの正心には口伝あり。つつじは下へつかいさげ、引き松は正心に用いず。檜は地生えを用い、薄は穂を用ゆ。草木にかぎらず出生の直なるもの、みな正心に用ゆべし。

副の事

副を古代は露請と名づく。云うこころは外の枝より高く、心の葉陰にのぼせて、松の雫を請ると云う心なり。然るに中頃より副と云う。心にしたしく副のぼすると云う義なり。たとえば大将軍に副将軍あるが如く、一方の花形を守り、心に勢いあらするは、副の役なるべし。

副はやわらかに、しだれるものをよしとす。心すこしのきたらば、直ぐなるものを立て副べし。広くのきたらば、なびきたるもの、葉のなきものには茂りたるもの、水ぎわのきにはきおいたるもの、幹狂いたるには内副に立つべし。松の副は細くやわらかなるを用ゆべし。或は大葉一枚にて副をあしらうもあり。

上手の副を付ると云うは、心にそうべき枝葉をよく見定め、出生のかたちにまかせ、念慮を入れずして、そのまま副る時は、自然の景気うつりておもしろし。初心の人は草をため、木をゆがめ、執着のこころを以て、強いて副うるにより、立てて後まで、思慮分別のところ花にあらわれて、つたなく覚ゆるなり。巧者はこの域をよくよく工夫すべし。

師語を作りて、副を付ることを教ゆ。副うて副わざれ、除いて除かざれ。誠にこれ中庸の道理にして、添いすぎたる時はいやしく、除きすぎたる時は、うつりあしきなり。

6

請の事

請と名のる事、心の勢いを請持つという義なり。心おもき時は請おもく、心かろき時は請かろし。副しだれたるものならば、請はきおいたるもの、副きおいたる物ならば、請はしだれたるもの。心、副、直なるものならば、請は風流に狂いたるもの。竹の請には習いあり。

請は心に次いでの大枝にて、専ら賞翫する枝なれば時の珍花を用ゆべし。

見越の事

見越と名付くるは、山を見越して高木の梢を眺める心なり。されば庭前に山を作るに、見越あるが如し。さるによって、小木高草を用いず。

見越と前置は前後の釣り合いにて、前置おもき時は見越おもく、前置短く出る時は、見越もまた心にそえて立つべし。

除心の見越は、さのみ左右高下をきらはず。正心こはきものならば見越やわらかに、正心色なく細きものならば見越は花やかに、大手なるものを指すべし。

藤、南天などのしだれたるもの、見越に用いる時は、兼ねて見越所を広くあけ置き、幽玄体になびかして指すべし。梅、水木の細きものは、正心より高く立つべし。

流枝の事

流枝と云うは、水ぎわ低く横へ長く流るる景色あるゆえ、流枝と名づく。また長枝とも書くべし。一瓶の内ひくく出すもの、流枝を定法として立てる。これ水ぎわの習いなり。

草木の横へはえ出るもの、いづれも流枝に用ゆ。しかれども葉先勢いなきものは用いず。広葉のたぐいならず。梅のずわひ心得あり。苔晒木の流枝は、いかにも細きを用ゆ。

流枝の出口、きつくりと出すべからず。本にてきおい、中にて沈み、すえにてあがる様に指すべし。出口は花葉を以てあしらいかけ、いやしからぬ様に出すべし。

流枝は心と見合わせ、副と見合わせ、控枝と見合わせて、胴前よりのうつりを第一とす。

流枝は瓶の後ろ隅より出して、梢を前へふらす。然れども前置より前へは出すべからず。瓶の口より梢さがる事を嫌う。請と流枝の梢、同じきを嫌う。

松の立花　仙溪

花材　松　あらぎ　木瓜（ぼけ）　糸菊
晒木　小菊「赤頭巾」
毬栗檀（いがくりまゆみ）
花器　銅立花瓶

◆斜め前から見た奥行き。

生花

葉蘭九葉

仙溪

花型　行型

花器　煤竹竹筒

九月の家元研究会では、葉蘭九葉の生花を稽古した。テキスト613号、616号にも葉蘭の解説があるので見返してほしい。出生（しゅっしょう）や独特の深みについて書いている。

葉蘭の生花は数多く活けなれることが大切で、巧みな葉づかいの技巧を自ら体得して、自らがその技法を開拓してゆくような研究態度がないと、美しい花形は作れるものではない。これは方法を知ることではなくて、自らが切りひらくような技術の生花である。理解すれば意外に簡単なものだが、それを理解しようとする熱意と努力が最も必要な生花である、ということを知らねばならぬ。

（「専溪生花百事」より抜粋）

◆横から見たところ。

立花

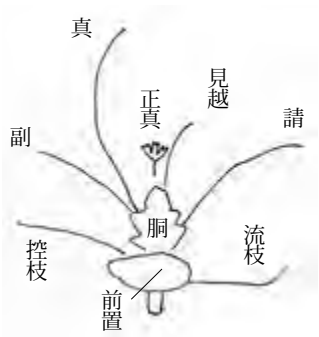
丸葉の木（紅満作）　仙溪

花型　行の真

花材　丸葉の木　檜扇の実
杜鵑　薮山査子　竜胆
糸菊　嵯峨菊（園芸種）

花器　陶花瓶

丸葉の木の紅葉を真、請、控枝に使っている。稽古で立てた初歩的な立て方だが、秋らしい色彩の立花だと思う。



◆横から見た、立花の奥行き。

桑原専慶流いけばなテキスト629号　2015年11月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（24）

仙溪

野茨（のいばら）の実（薔薇（ばら）科）
鶏頭（けいとう）（莧（ひゆ）科）

赤い実に赤い花を出逢わせて、黒い器にいけてみた。

撮影のあと、床の間に飾ったが、水辺の黒い杭に留まる鳥の絵の軸とぴったり合っていた。いい出逢いが生まれたときは、素直に嬉しい。

花器　黒釉陶花器

陰陽五行

現在使われなくなった旧暦（太陰太陽暦）に興味を持つと、陰陽五行思想にゆきついた。日本文化に携わる者として、そんなものもっと早くに知っておけ、とおしかりを受けそうだ。

今、吉野裕子著「陰陽五行と日本の民俗」を読んでいるところだ。まだ最初の数ページだが、とても難解。でも非常に面白い。古代の中国で生まれた哲学だが、天地のはじまりも陰と陽で説明でき、木・火・土・金・水の五元素（五気）の作用と循環、すなわち五行によって、万物が生成され、自然界が構成されている、というもの。

要するに陰陽五行の法則を知っていると、自然のことがストンと理解できるのではないか。そうだとすると、修める価値は非常に高い。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
12月号
No.630

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

季節感ととり合わせ

櫻子

色鮮やかな実がたわわについたマユミ（檀）の枝。まさに季節の輝きそのものだ。黄色の嵯峨菊で華やぎを加え、白椿で品良くまとめた。花器の紫色も格を高めてくれている。

作例の3種の花材と器。この4つのとり合わせのどれか一つが別のものになれば、違う雰囲気のいけばなになるだろう。この組みあわせがベストとは思っていない。でも私が出したいと思った晩秋の色合いは出せたのじゃないかと思っている。

マユミと白椿は組みあわせの定番だが、そこに鮮やかな黄色でしかも可愛らしさを備えた季節の花を加えたかったのだ。嵯峨菊がとてもよく似合うと思う。

花材　檀（まゆみ）（錦木（にしきぎ）科）
　　椿（椿科）
　　嵯峨菊園芸種（菊科）
花器　紫紅釉花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。

プリンセチア

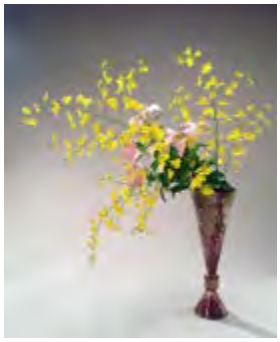
櫻子

ポインセチアが花屋さんの店先に並ぶと、ああ、もう12月なんだなと気づかされる。最近はクリスマスカラーのポインセチアばかりでなく、白やピンクの花も作られるようになった。

今年とても綺麗な色だなと買い求めたのはプリンセチアという品種。華やかなピンクの葉が隙間なく広がる新品種だ。軸も長いので、鉢植えから切り取り、オンシジウムと投げ入れにした。

メキシコ原産。トウダイグサ科のユーホルビアの仲間なので水切りして、切り口から白い樹液を流してからいけると、良く水を吸い上げて日持ちしてくれる。暖かな場所に飾りたいクリスマスの花。

花材　ポインセチア（燈台草科）
　　オンシジウム（蘭科）
花器　金彩ガラス花器



◆横から見た、いけばなの奥行き。

（表紙の花の解説は9頁）

基本花型にいける

主材　若松（松科）
副材　水仙（彼岸花科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　陶コンポート（宇野仁松作）

若松を主材にした正月花の作例。花屋には12月初旬の松市のあと、正月用の松が並ぶ。色々な松が売られるが、生花にせよ盛花にせよ、一番身近な松は若松である。

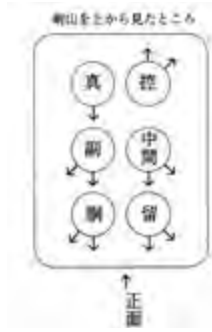
小枝の出た節から上は一年で伸びた部分で、強い生命力を感じる。

作例のとり合わせは、花器の大きさにあわせて大きくも小さくもいけられる。小さな花器なら、若松1本に水仙2本と薔薇1本でもいけられる。またそれぞれの本数を増やせば大きな花にできる。

薔薇の代わりに千両をとり合わせてもよい。

◎剣山の主要部分の説明

それぞれの役枝を剣山に挿す場合、位置と方向は、およそ左の図のようになる。



立体真主型

◆横から見た、いけばなの奥行き。

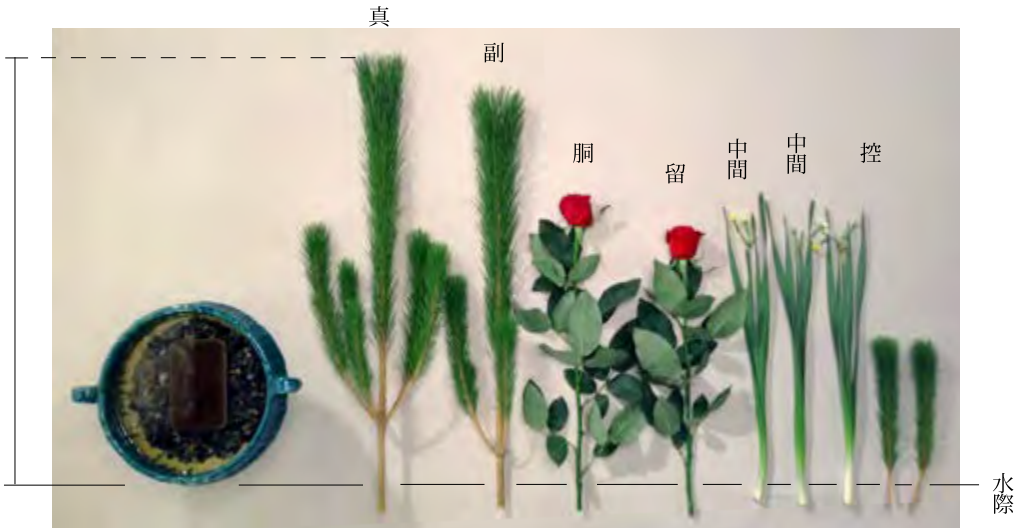
① 小枝つきの若松を真の位置に立てる。花器とのバランスを考えて長さを決めているが、花器が小さめの場合は若松の主枝と脇枝を上下に切り分けていけてもよい。

② 真の左前に副の若松を立てる。真主型なので、真よりも副を少し短くした。窮屈な小枝は切っておいて最後に加える。副についても花器の大きさによっては上下に分けていけてもよい。

③ 胴と留の位置に深紅の薔薇を加える。薔薇はいける前に充分に水揚げをしておくこと。薔薇が小さめの場合は、バランスを考えて本数を増やす。

④ 中間の位置に水仙を2本入れたところ。水仙の葉が広がりすぎないように。緑色の細針金で括って整えてもよい。長すぎる場合は切っていける。
控に水仙を加え、松の小枝で水際をつくる。（4頁の花）

それぞれの長さ。主材の長さは、花器の幅と高さを足した長さの1.5～2倍を目安にして、水の中の深さを加えて切る。



立花秘傳抄　五

立花名目　並びに　訓解（つづき）

前置の事

前置は一瓶の内、これより前へ長く出る物なき故、前置と名付く。前は先という心なり。古代、胴作りと前置をひとつに立のぼせて前置という。中頃より胴、前置と二つに分かれたり。さるによって胴は七つの枝の外なり。

前置になる物、出生ひくくして横へ生える物皆前置なり。著莪、水仙、わくら、かなめ、これらの類前置にならず。このほかなぞらえて知るべし。

ある師の曰く、ぎぼうし、河骨、前置にならずと云えり。その道理いかにと尋ぬるに、立花七つの枝という時は、枝なき物は前置にならずと云えり。おぼつかなし。蓮花、芦、蒲、鶏頭、水仙、これ皆枝なき物といえど、古来より七つの枝に用ゆ。もしまた茎と葉と分かれたるを枝なりと云わば、車を横におさんとするの類なるべし。

前置に古来より説々あり。一つには木末横へふりたりとも、前へ長く出たる物、前置になると云えり。一説には長く出ざれども、正面にある物を前置と見るべしと云えり。さにはあらず。前へ長く左右へかたよらざるは真の前置なり。かたよりて長く出るは行の前置なり。引っ込みて正面に立るは草の前置なり。この理をよくわきまえて花を見物する時は、その惑いあるべからず。

除心立の前置は、胴のうつりを請けて左右へはづませ、前へ長く出して谷洞をかまえ、美花美葉をもって幾重も景をとるを弥立と名付けて、巧者のなす所なり。

胴あざやかなる物ならば、前置はこまやかなる物。柔らかなる物ならばかたき物。草の心には前置かるく、木の心には前置おもく。ぎぼうしは陰陽をつかいわけ、笹は剣先をわきへふらせ、高き所の花ならば前置の先低くかたむかせ、対の花には同じ物を用いず。松、おもと、小しだを三ケの前置と云う。相生心、二つ真、あわせ心、これ皆伝授の前置なり。そのほか常の花にも口伝これ多し。

前置は花形のかなめ、草木の根じめなり。前置浮く時は花形すわらず。たとえば人のつま立てて立つるがごとく見にくき物なり。これ一つの習なり。

胴作りの事

胴と名付けしことは花書に云く、立花の形は天上天下唯我独尊の御容をうつせり、といえるより胴と云うなるべし。これ瓶上の景所、花中の手所にして、縦横左右前後の大枝を育てる所なり。されば初心巧者によらず、精魂をくだくはこの所なり。

胴作り、祝言不祝言の立てようあり（口伝）。胴は丸く景多きを専らとす。下手の胴には景少なし。丸きものには細き物。かたき物にはやわらかなる物。こまやかなる物にはあざやかなる物。白き物には赤き物。紫なる物には黄なる物と花葉のうつりよく心得てさす時は、一瓶のすがたあざやかにて見所多きなり。

控枝の事

控枝は七つの枝の外にして、真の花には出すことを嫌うといえど、草の花形に至りては心のふりによりて長く出し、請の木つきによりて風流をつくす。これ花の一体なり。そうじて花形珍しく指し出さんと思わば、長かるべき物を短く出し、短き物を長く出し、副下控枝の間あきに心を付、一作珍しき景を取るべし。又控枝なき花形も面白きものなり。

立花腰の事

流枝、控枝の後ろを腰と名付く。心おもき物なれば、腰を松、檜などのつよき物にてあしらうべし。腰よわければ倒れるように見えるものなり。初心の内は前にばかり心つきて、後ろをかならず仕残すにより花形すわらず。古人の云う、花形は衣冠束帯して座するがごとく立つべしといえり。

水ぎわの事

水ぎわ夏は高く、冬は低く、草の両どめは口伝あり。一方茂りたらば一方軽く、一方木ならば一方草にてとむべし。笹、小しだは少しひらめに遣い、みやまは草の方に指さず。苔は水ぎわにて見せ、晒木は見せず。竹は一節を見せる。外を略す。

水ぎわの指込は矢篠を結いたるがごとく、大小出入りなく美しく繕いたるを大きに嫌うなり。幹太きあり細きあり、出入りところどころありて、又つかねてふつつかならざる様に立つべし。これ故実なり。

水ぎわに三師の流々あり。まず一流には草木自然体を専らとして下草つくろわず、花はそのままの枝を用い、葉はおのがはたらきにまかせ、あつく無造作なるようなれども学びがたきところあり。又ある師の流には水ぎわ軽きを好んで下草うすく、たとえば名人の生花を一種一種よせたるがごとく、景気やわらかに一花一葉に心を付て、はたらきあらずという事なし。誠に及びがたきわざなるべし。又ある流には、しいて花葉の奇麗を好み、花をならべ葉をそろえて、水ぎわ結いしめたるがごとし。十人に八九はこれを好み、巧者は大に笑う。この三流、よくよくわきまうべし。

梅擬（うめもどき）　菊

＜9頁の花＞　仙溪

花屋で洋種梅擬として赤と黄色の梅擬が売られていた。枝にびっしりついた実は大きくて色鮮やかだ。格調高い感じというよりは、大らかで潑剌とした印象を受ける。

とり合わせには梅擬と同系色の菊をいろいろ選んで遊んでみた。金茶色の糸菊と二輪菊、濃赤色の金茶菊、黄色とレンガ色のポンポン菊。撮影したのは11月初旬の菊たちである。

花材　梅擬2種（黐（もち）の木科）
　　菊5種（菊科）
花器　梅花皮釉（かいらぎゆう）水盤（木村盛伸作）

◆横から見た、いけばなの奥行き。

役目を終えて

＜表紙の花＞　櫻子

ノイバラや鈴バラが終わる頃、立ち姿のバラの実が少しだけ出回る。美しい花が咲き終わり、これだけ沢山の実をつけるには、株はかなりのエネルギーをつかうのだろう。

丈は短いが、実は大粒で艶々としていて美味しそう。でも実際は食べても種ばかりで野鳥も見向きもしない。餌の少なくなった冬の頃仕方なく食べるらしいが。

グロリオーサとアンスリウムの葉は片方に寄せておき、反対側にバラの実をかためて釣り合いをとっている。赤い器に、赤い実と赤い花。そこへ白いアマリリスを立てると12月らしい雰囲気になる。

花材　アマリリス（彼岸花科）
　　グロリオサ（百合科）
　　薔薇（ばら）の実「センセーショナルファンタジー」（薔薇科）
花器　赤色釉花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。

寒桜

仙溪

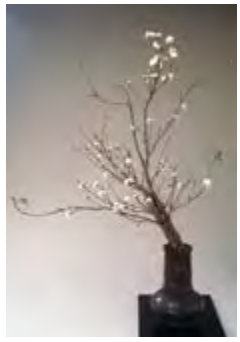
花型　生花　留流し

花器　耳付銅花器

ネパールの首都カトマンズでは、ヒマラヤザクラが秋に咲く。桜のルーツはヒマラヤ付近と考えられ、もともとは秋咲きであったのが、日本にやって来た頃には冬の厳しい寒さに対応するため、秋に咲くのをやめて冬の間は休眠し、春に花を咲かせるようになったそうだ。

日本で秋から冬に咲く桜には、故郷の記憶が遺伝子に残っているということかもしれない。

花屋には、十月桜、冬桜、子福桜（こぶくさくら）などが寒桜の名前で出回る。写真の桜は八重咲きなので子福桜だと思う。近頃は寒桜をいけながら遥（はる）かネパールに思いを馳せている。



横から見たところ

インターネットの写真投稿サイト「インスタグラム」に日々の写真を投稿中です！
（www.instagram.com/gonchansensei）

琳派に習う

仙溪

左の写真は四条通のウィンドーを飾る「琳派400年にいける・いけばな展」に私が出品した花だ。

天井の高いウィンドーだったので、青竹を器にして紅白の実を上下にいけることを考え、デニム生地をバックに吊して赤と白を印象的に見せる工夫をした。ウィンドーではガラスに風景が写り込むので、持ち帰って写真に撮った。

「琳派」を辞書で見ると、江戸時代における絵画を主とする工芸、書などの装飾芸術の流派で、本阿弥光悦と俵屋宗達を祖として尾形光琳が大成し、酒井抱一へと発展した。絵画は技法、表現ともに伝統的なやまと絵を基盤とし、画面の豊かな装飾性が特色。とある。

今年は本阿弥光悦が徳川家康から京都鷹峯の地を拝領して四百年にあたる。

琳派の人気の秘密は何だろう。伝統の技と品格に磨きをかけて、新しい着想と技法を駆使し、時代が望む新たな「美」をつくろうとした情熱が心を打つのだろうか。

「琳派」の技法やデザインを現代に生かすことも意義深いことと思うけれど、試行錯誤しながら新たな時代をつくる情熱こそ、この節目に見習わなければと思っている。

花材　南京櫨（燈台草科）
　　白玉椿（椿科）
　　黐の木（黐の木科）
　　数椿（椿科）
花器　青竹

陰陽五行

仙溪

私が陰陽五行に興味をもっているのは、なにも陰陽師になろうなんてことではない。ただ、一人の華道家として植物のことをより深く知りたいという思いとともに、人と自然の関わりを見直すヒントがあるんじゃないかと思うのだ。

陰陽思想と聞くとなんとなくかけ離れた古くさい迷信のような考えに思う人が多いだろう。まず陰と陽について、それぞれどのような定義があるのだろう。中国古代哲学としての考え方を見てみよう。

原初、宇宙は天地未分化の混沌たる状態であったが、この「混沌」の中から光明に満ちた軽い澄んだ気、つまり「陽」の気がまず上昇して「天」となり、次に重く濁った暗黒の気、すなわち「陰」の気が下降して「地」となった。

このことは中国の古典、『淮南子』（紀元前一四〇年）の「天文訓」に書かれているが、同じ内容が「日本書紀」の冒頭にも引用されている。

この陰陽の二気は、元来が混沌という一気から生まれたというところが陰陽思想の要だと思う。（つづく）

桑原専慶流いけばなテキスト630号　2015年12月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（25）

仙溪

無患子（むくろじ）（無患子科）
薮椿（椿科）

無患子の枝をいただいた。丸い実がたわわについている。実には黒くて丸い種が一つ入っていて、半透明の果皮の内側で、ころころと動くのがわかる。作例の左下の実を切っておいたので見ていただけると思う。

黒い種は堅くてよく跳ねるので、正月の羽根つきの羽根の重しにされた。病気を運んでくる蚊を食べてくれるトンボにみたてた羽根には、子供が病気を患わないようにとの願いがこめられている。

この貴重な無患子の枝が品良く引き立つ器として、漆器を選んだ。枝を挿すと、朱色の宝袋からぽんぽんと珠（たま）が飛び出しているように見える。艶やかさと瑞々しい生命力を感じさせてくれる薮椿は、飛び跳ねて遊ぶ子供達を見守るお母さん。

花器　朱塗花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。